新女子國文 巻七

46
810
昭5

42272
教科書文庫
4
810
42-1930
20000
85188

資料室

文部省檢定濟
昭和五年四月五日 高等女學校國語科用

文學博士 芳賀矢一 編
文學士 橋本進吉 訂補

改新女子國文

東京 合資會社 冨山房發兌

4b
810
昭5

東下り

尾形光琳筆

広島大学
敎
85188
図書

改新女子國文　卷七目次

一　山櫻……一
二　京都御所拜觀の記……七
三　櫻あらそひ……(狂言)……一二
四　大和を歩く……荻原井泉水……一五
一〇 小品二題(自修文)……高濱虛子……二五
　春雨……二五
　橋の上に立つて……三〇
五　水の上……井上康文……三五
六　信濃路の旅……正岡子規……三九

七　春の句、夏の句……四九

八　をりふしの移り變り……吉田兼好……五一

節供と家庭（自修文）……倉橋惣三……五四

九　晩春の別離……島崎藤村……六〇

一〇　櫻井の驛……（太平記）……六八

一一　東下り……（伊勢物語）……七二

一二　をさな兒……小林一茶……七五

子等と共に（自修文）……原田譲二……七八

一三　松下禪尼と最明寺入道……吉田兼好……八八

一　松下禪尼……八八

二　最明寺入道……八九

一四　母としての日本婦人……鶴見祐輔……九〇

一五　女子と文學……一〇二

一六　ここまで來た……野口米次郎……一〇九

一七　Z伯號に同乘して歐亞の空を渡る……北野吉内……一一二

一八　川柳點……金子元臣……一二七

川柳に現れた女性（自修文）……山内素行……一三三

一九　十六夜日記……阿佛尼……一四三

二〇　琵琶行……（唐物語）……一四八

二一　妻の眞心……佐々木信綱……一五一

二二　生活に伴ふ婦人の自覺……高島平三郎……一五四

二三　眠れる蝶……北村透谷……一五八

二四　美しい心を保て……吉田絃二郎……一六〇

二五　心の花……………………一六七

改新女子國文　卷七

一　山櫻

若山牧水

うすべにに葉はいちはやくもえ出でて咲かんとすなり山ざくら花

金子薫園

牛のゆく白川道の水ぐるまかたりことりといとまあるかな

尾上八郎(一)

つけすてし野火の煙のあかあかと見えゆくころぞ山は

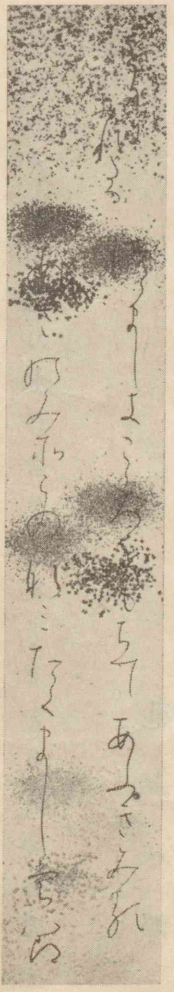
(一)歌人。書家。號は柴舟。文學博士。東京女子高等師範學校教授。岡山縣の人。

なりにふれたる
つゝましきこころをもちてあふきみるあさのみそらのなみたくましも　八郎

(一)歌人。慶應義塾大學教授。京都府の人。

(二)歌人。短歌雜誌橄欖を主宰してゐる。千葉縣の人。

悲しき


尾上八郎筆蹟

與謝野寛(一)

くつ底の細きを見せてひざまづき祈るさまにも草をつむ君

正岡子規

いたづきの癒ゆる日知らぬにさ庭べに秋草花の種をまかしむ

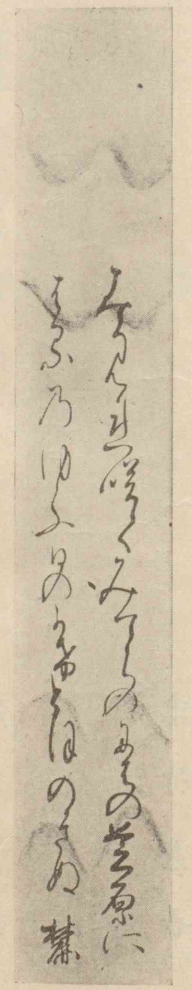
吉植庄亮(二)

さぬつどり雉子あそべるわが庭に李の花の青く散りつつ

(一)歌人。書家。名は三郎。

すみれ咲くみてらのにはの芝原にはるのゆふ日のかけとほのきぬ　麓

(二)歌人。歌論家としても知られてゐる。本名は折口信夫。


岡麓筆蹟

岡　麓(一)

葉櫻の葉だりの露の朝じめり山吹草の花咲きにけり

木下利玄

牡丹花は咲き定まりて靜かなり花の占めたる位置のたしかさ

釋迢空(二)

山岸に晝を地蟲のなきみちてこの靜けさに身は疲れたり

前田夕暮

まひる日のあきらかにてれる山原は大いたどりの花さ

かりなり

吉井勇(一)

空と海たぐひもあらぬまたきもの二つながめて心なごみぬ

長塚節

たらちねの母がつりたる青蚊帳をすがしといねつたるみたれども

尾山篤二郎(二)

山川に水はともしも岩ごもり流れてひゞく音のしづけさ

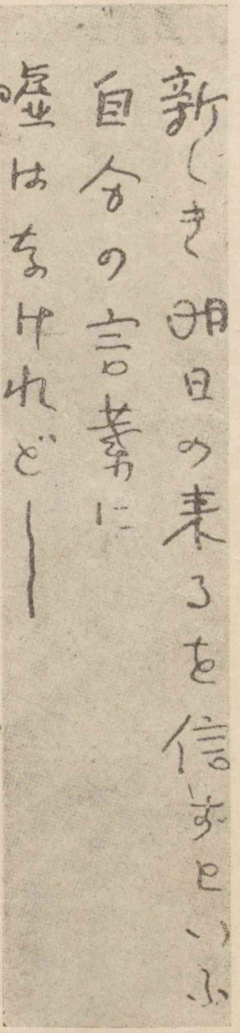
中村憲吉(三)

夏山をめぐり疲れて日暮方となりの國の出雲へくだる

石川啄木(四)

(一)歌人。小說家。伯爵。東京の人。
(二)歌人。短歌雜誌を主宰してゐる。金澤市の人。
(三)歌人。法學士。もと大阪每日新聞記者。廣島縣の人。
(四)歌人。名は一。岩手縣の人。明治四十五年歿、年二十八。

父のごと秋はいかめし母のごと秋はなつかし家もたぬ子に

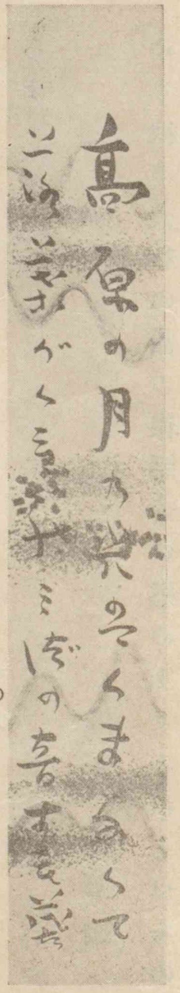


石川啄木筆蹟

窪田空穗(一)

ゆふづける那須野が上の穗すゝきの遠山なみとともにうごかず

齋藤茂吉(二)



齋藤茂吉筆蹟

新しき明日の來るを信ずといふ自分の言葉に嘘はなけれど

(一)歌人。國文學者。名は通治。長野縣の人。

高原の月の光はくまなくて落葉がくれのみづの音すも　茂吉

(二)歌人。醫學博士。山形縣の人。

(一)奈良縣生駒郡都跡村大字六條砂村にある。

(二)歌人。名は幾太郎。千葉縣の人。

しづかなるたうげをのぼりこし時に月の光は八谷をてらす

佐々木信綱

ゆく秋の大和の國の藥師寺(一)の塔の上なるひとひらの雲

土岐善麿

いとまなくはたらく妻をよびいでて富士見はるかす朝のはたけに

古泉千樫(二)

目の前に五百重おきふす雪の山しづかなるかな鷹ひとつかける

北原白秋

松原のしぐるゝ寺の前どほりとほる人はあれど日の暮のかげ

(一)歌人。號は春國。千葉縣の人。大正二年歿、年五十。

天地のよもの寄合を垣にせる九十九里のはまに玉拾ひ居り　左千夫

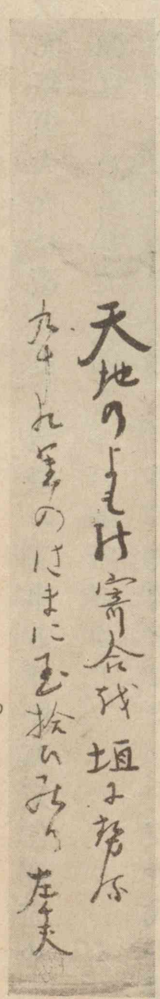
(二)國文學者。號は萩之家。舊仙臺藩の人。明治三十六年歿、年四十一。

神々し

殿掌

伊藤左千夫(一)

みぎひだり背によりつくを負ひなめて笑あふるゝ眞晝の家に



伊藤左千夫筆蹟

落合直文(二)

一つもて君をいはゝん一つもて親をいはゝん二もとある松

二　京都御所拜觀の記

京都御所を拜觀したる時ほど、神々しかりしことなし。わが拜觀したるは四月半ば頃なりしが、殿掌なる人に導かれて、かしこ

踏む足も空

里內裏

(一)孝明天皇の御代。元年は紀元二五一四年。

故實をたゞす

ここ廻るに、麗かなる都の春は、たゞこの九重の中に籠れるが如く、踏む足も空にて、人間の世界を出でたるやうなり。

私に承るに、皇居は初よりここにありしにあらず。平安時代の末よりをりをりの里內裏となり、今より五百餘年前よりここに定まりしなり。百四十餘年前天明の大火後、幕府勅命を受け、老中松平定信に命じて、新たに造營の工を起す。從來略式にのみなりゆきし皇居も、この時より儼然として舊制に復したり。然るに安政(一)元年復大火に遭ひ、更に造營の工事あり、槪ね定信が定めし式に從はしめられたる、卽ち今の御所ぞかし。

紫宸殿清涼殿等は定信が深く故實をたゞし、平安時代の舊制に復せしものなり。今の御所もまたこれに倣へるものにして、千年の昔を目のあたり見る心地す。

紫宸殿は皇居の正殿にして南面し、その前に南庭あり。階前の

節會

めでたし

賢聖、障子

(一)有名な畫家。清和、陽成、光孝、宇多、醍醐の五朝に歷仕して、官大納言に至つた。

左右に左近、櫻、右近、橘の二本の樹ある外は塵も留めず。今は春の日の、一面に敷きつめたる砂を射て眩きばかりなるが、元日の節會に、ほのぼのと明けはなれたる初日の光など、如何にめでたからんと覺ゆ。

賢聖ノ障子

殿は廣き一面の板敷にして、中に唐代の賢臣をゑがける襖あり。いはゆる賢聖、障子にして、昔は巨(一)勢金岡の筆になれるものなりきといふ。明治天皇も、先帝も、いづれもここにて御卽位の式を擧げ給ひしなり。大正四年の大典には余も參列者の一人たる光榮を擔ひしが、この日紫宸殿上には天皇

御帳臺

威儀の人

世移り風變る

母屋

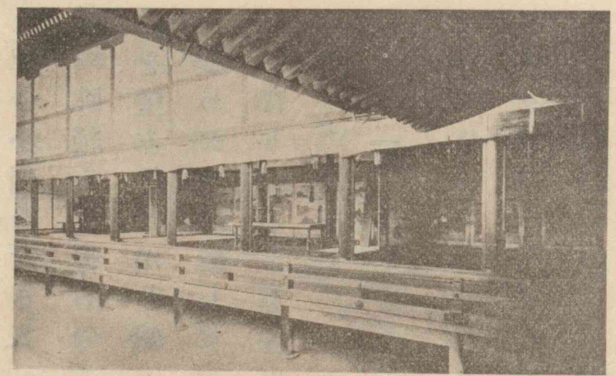
陛下の高御座と、皇后陛下の御帳臺とを据ゑ、階下近く立てたる日光月光の大旛をはじめとして、紅、黄、綠、紫、幾十の大旛小旛の風に翻れるも麗しく、威儀の人の黑袍、紅袍、鉦鼓の人の綠袍にてゐ並びたるもいかめしかりき。廻廊には大禮服の文武官、燕尾服の衆議院議員、外國使臣も交りて、その對照まことにおもしろく古今東西の文化を集めたる盛觀とぞ覺えし。

紫宸殿

清涼殿は昔は主上の御居間なりしが、世移り風變りては、日常の御起居に適せずなりて、近世はたゞ上古の形を存したるなりと申す。正面の廂間に晝御座あり。母屋に御帳臺を

塗籠

立つ。傍の塗籠は夜御殿とて、御寢所なり。母屋の南の別室は殿上といひ、殿上人の祗候する所なり。東なる弘廂に昆明池障子あり。昆明池障子に近く荒海障子あり。一は漢の昆明池を描き、一は手長、足長が魚を捕らふる圖を描く。また殿上の上戸の東外には、年事行事障子とて、年中行事の次第を記しゝものあり。西外には跳馬障子あり。上古のは金岡の筆にして、夜々脱出でて萩戸の萩を食ひしかば、勅ありて轡を描き加へしめられたりと傳ふ。清涼殿は東面して、階前に漢竹、吳竹を植ゑ、御溝の水その側を流る。その他には小御所、御學問所、常御殿等あり。いづれも近世の樣



清涼殿

林泉の巧

(一)賀茂川の一名。

(二)比叡山の一支峰。

えいたさぬ

式なり。小御所、御學問所は謁見など仰せつけらるゝ所、常御殿は卽ち主上の御居間と申す。その東の御庭、林泉の巧いふばかりなし。蟬(一)の小川をせき入れて池をたゝへ、池邊には花木を植ゑて、四季の眺絶えず。彼方の木立少し切下げたるは、如(二)意嶽の大文字の火を望み給はんが爲とぞ。

一わたり拜觀したるばかりにて、よくは覺えず。九重の雲深き御わたりのことを書出づるも畏しや。

—高等小學讀本に據る—

三　櫻あらそひ

アド「これはこの邊のものでござる。このごろ何方も花の盛ぢやと申すほどに、花見に參りたう存ずれども、暇がなさに參ることもえいたさぬ。もはや暇になつてござるほどに、けふは花見に參らうと存ずる。まづ太郎冠者を呼出し、申しつけう。やい、やい、太郎

賴うだ人

言語道斷

冠者あるか。シテ「はあ。アド「ゐたか。シテ「お前に居ります。

アド「汝を呼出すこと別のことではない。頃日(このごろ)は方々花盛ぢやといへども、暇がなさに、花見に行くこともならなんだ。もはや暇になつたほどに、花見にいでうと思ふが、なんとあらうぞ。シテ「これは珍しいことを仰せられます。この頃は櫻の盛ぢやと申すほどに、櫻を御覽ぜられうとあれば、尤もでござるが、珍しからぬはなを御覽ぜられて、何にさせらるゝ。アド「いや、おのれ何事をいふ。櫻も花も同じことぢや。シテ「これは賴うだ人とも覺えぬことを仰せらるゝ。さやうに仰せられたらば、人中で恥をかゝせられう、身どもは苦しうござらぬが。アド「して、汝がそのやうにいふは仔細があるか。シテ「なかなか、仔細こそござれ。はなが見させられたくば、私が鼻を見させられ。他所へござるまでもござらぬ。アド「いや、汝は言語道斷のことをいひ居る。汝が面なは鼻といふ。花といふ

は別ぢや。シテ「さうではござらぬ。歌などにも櫻とは詠まれたれども、花とは詠まれませぬ。アド「なかなか、てもないことをいひ居る。その歌を讀うで聞かせい。シテ「讀うで聞かせたらば、肝を潰させられう。アド「急いで讀め。シテ「心得ました。

(一)櫻ちる木の下かぜは寒からで
　そらに知られぬ雪ぞ降りける

これはなんと。アド「此方にも花といふ歌がある。シテ「さらば讀うで聞かせられい。

(二)行きくれて木の下かげを宿とせば
　はなや今宵のあるじならまし

シテ「此方にもまだござる。

(三)やま櫻わが見にくれば春がすみ
　峰にも尾にもたちかくしつゝ

てもないこと

(一)紀貫之の歌。拾遺集卷一春の部に出てゐる。

(二)平忠度の歌。平家物語卷九に出てゐる。

(三)よみ人知らず。古今集卷一春の部に出てゐる。

アド「それなら此方にもある。

(一)花の色はうつりにけりないたづらに
　わが身世にふるながめせしまに

シテ「それならば此方に謠がござる。アド「うたへ、聽かう。シテ「櫻かざしの袖ふれて。アド「一段の謠うたふ。いたしやうがござる。やい太郎冠者。謠「花見車くるゝより、月の花よ待たうよ。月の花よ待たうよ。シテ「はあ、これでつまりました。アド「總別何も知り居らいで、むざとしたことをいひ居って、某と競合ひ居る。彼方へ失せい。シテ「はあ。アド「えい。シテ「はあ。

――續狂言記――

四　大和を歩く

(一)荻原井泉水

三輪初瀬

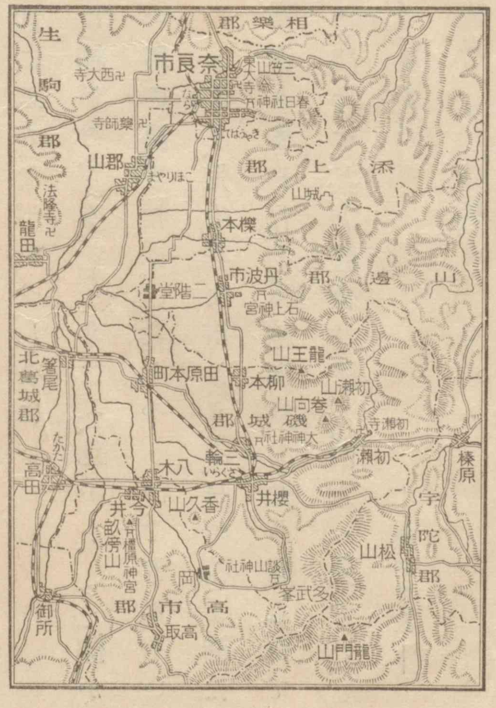
毎日降つたり曇つたりしてゐた花時の空がこの日はくつき

(一)小野小町の歌。古今集卷二春の部に出てゐる。

總別　むざとしたこと

(一)俳人。名は藤吉。明治十七年東京に生まれた。自然の扉。俳句提唱。山水巡禮等の著がある。

りと晴れて、美しく拭ひとつたやうな麗かさであつた。桃畑梨畑などが花をつけて一二反づつ、ところどころ、汽車の窓の右手にも、左手にも見わたされた。櫻も山の裾に、藪の前に、野路の傍にまたは停車場の構内にも咲いて、盛はちと過ぎたけれど、見所は十分にあつた。京極、櫟本、丹波市、柳本などといふ驛の名からして、大和らしく長閑な感じだつた。汽車路に沿うて小さい溜池が多くあり、その水が晝近い光をきらきらと湛へて、外を眺めるくらゐにも思つた。私は三輪で



降りた。

この驛の櫻は、レールの上に雪を降らしたやうに散つてゐた。高い柳の木が、地に届くぐらゐ、ふさふさとした青い絲を垂れてゐた。三輪の町の昔の街道は狭い。町一ぱいになるほどの大きなあめ色の牛が、荷を曳いて通つてゐた。

「金魚や――金魚――」。

どの家も、晝寝でもしてゐるやうにしんかんとして、子供すらも出てゐない。

大神(おほみわ)(一)神社の一の鳥居をくゞつて、杉と松との並木を行くと、向うに見えるなだらかな山が三輪山である。その左手にがつしりとして高いのが巻向(まきむく)の山、その奥が弓月嶽なのであらう。爪先上りになるにつれて、顧すると、畝火と耳成の二つの岳は、三輪の町の屋根の上にちよつぴりと見える。このあたりは萬葉時代の歌

(一)官幣大社。三輪町三輪にある。

吟懷發祥地

(一)奈良縣磯城郡上ノ郷に發して、末は佐保川に合してゐる。

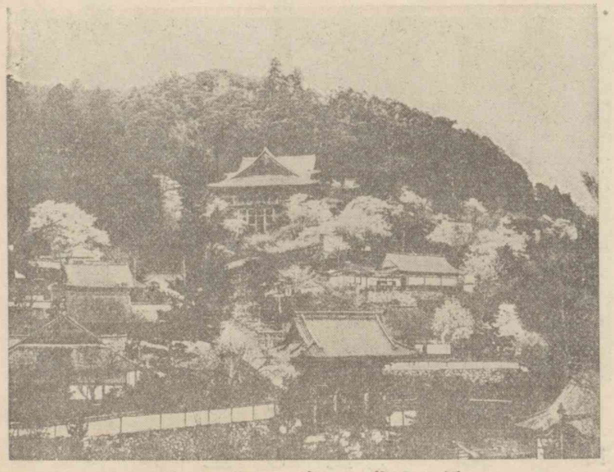
人たちが吟懷をほしいまゝにしたところなのである。見方によつては、このあたりこそ日本詩歌の發祥地であるというてもよい。雲雀がひつきりなしに囀つてゐる。二の鳥居を入る頃から、日光と陰影とのくつきりした木立となつて、その淸らかな參道の行きあたる所に拜殿があつた。

拜殿に御簾をさげて、さて本殿はと見れば、それは社殿としては作られてゐない。卽ち大神神社はこの山を以て神體とするのである。その三輪山は、青い松が美しくすいすいと生ひそろつて、誠に玲瓏たる姿である。この神にゆかりのある「をだまき塚」をたづねようと、社から左への路を入つたが、私は道をまちがへて、ただ御形や菫の花が澤山咲いてゐる中を歩きまはつただけで終つた。

櫻井から初瀨へは、昔の道筋を通つた。(一)初瀨川に沿うて、當今は

(一)眞言宗豐山派の總本山。磯城郡初瀨にある。

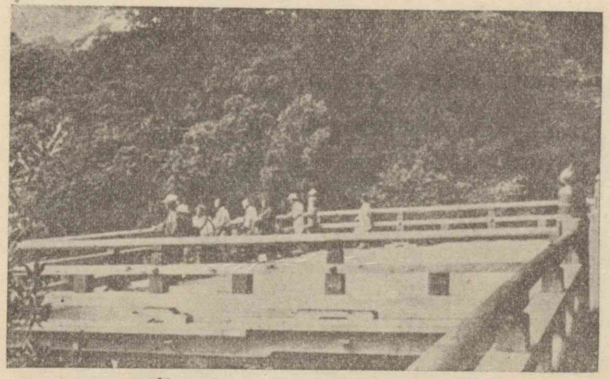
淋しい家が並んでゐるだけだが、さうした家の軒下からは青い草がびつしりと延びてゐた。またこのあたりは椿が非常に多く、川の水を堰くくらゐに花が川の中にも落ちてゐた。(一)長谷寺は今が櫻の盛だつた。樓門を入り、牡丹の芽を赤らんだばかりと見ながら廻廊を上ると、練塀の上からだらりとしてゐる枝垂櫻や、崖の下から枝をささげてゐる八重櫻が爛漫としてゐた。觀音堂の舞臺から見おろすと、この谿間は大きな壺のやうで、その壺に花を盛つたといふ感じであつた。



長谷寺全景

(一)芭蕉の句。

私はこの長谷寺へ二年前にも詣でたことがある。その時は三十三所の巡禮として來たので、春のおぼろおぼろとした夜であつた。納經所の窓口ももう締るばかりのところで、寺僧は私の爲に御判を押すと、灯を消して去つてしまつたので、堂内は暗く、お籠りでもする人の爲にしつらへたらしい一段と高い疊敷に、夜風が薄寒く漂うてゐたがそれでも、



觀音堂の舞臺

　春の夜や籠り人ゆかし堂の隅(一)

の句も思ひ出されたのであつた。

　今日は夕日が美しい。この谿は西へ口を開いてゐるので、そこから流れ込む夕日がまともなのである。舞臺から左手へ、地藏堂、大師堂など

聖なる雲

(一)姓は南。芭蕉の門人。

と、山の中腹に建つ諸堂に沿うてある道をほぼ半周すると、夕日に照りはえる觀音堂を正面に眺めることになる。そして堂をかこむやうにたなびいてゐる櫻の花が、聖なる雲のやうである。私は花の名所としての初瀬を、けふ初めて見たといふ氣がした。諸堂を連ねる山腹の路も靜かでよい。自分の下駄の足音がからころとその石道に響くのが淋しいくらゐで、そこらの枝にゐる小鳥もその音に驚きもしない。

　足駄はく僧も見えけり花の雨

　芭蕉と一緒に來た世を忍ぶ杜國(一)が、この寺での句である。その時もやはりこのやうな花の盛であつたと見える。足駄をはく僧の姿に殊更感興を覺えたらしい杜國の氣持は、しつくりとは解らないけれども、足駄の音が長い石段にさゝやいてゆく憂鬱らしい感覺なども、彼の心をそゝつたのである。三輪から多武峰へ

は、櫻井を通つて約二里であらう。私は三輪を先によつて來たから、初瀬から櫻井を過ぎて多武峰へ――櫻井では最初の乘合自動車に間に合つた。道がひどく荒れてゐるので、飛上らせられるやうに搖れるのであつたが、運轉手はそんなことには頓着せず、もう暗くなる山路をしやにむに突進させた。大和第一の(一)石の鳥居といふのも、車の中からちらりと見たばかりで過ぎた。

多武峰

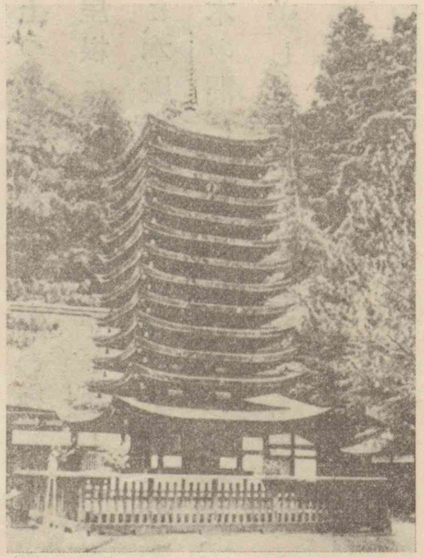
小鳥の聲――水の音――眼がさめると、雨戸をたてない硝子戸を通して、水のやうな春の朝がひたひたと澄んでゐた。小鳥の聲は裏の楓の林で囀つてゐるらしく、水の音は、宿とは道一つだけ隔ててゐる、祓殿の御池に落ちる清水なのである。老梅が一本、檜皮葺の軒に白い貝殼のやうな花を散らして居り、さるすべりの枝からは露がほとほとと垂れてゐた。夜を籠めて月が冴えた

(一)多武峰にある談山神社の大鳥居といふ。

(百日紅)

爲か、木も草もしつとりと露を帶びてゐるのだつた。

談山神社はこの宿の――いや、この宿が談山神社の境内にあるといふ方が當つてゐる。私はつめたい山水で顏を洗ふと、外へ出て見た。境内は、一本の塵も止めないやうな淸らかさに、輕く水を打つたやうに濡つてゐる清々しさ。石段を登ると、拜殿は、下から高い柱を立てて乘出すやうな形に作つた朱の廻廊であり、それに續いて本殿があり、名高い十三重の塔は少しおりた平地に立つてゐた。ここを俗に關西日光と稱するわけは、德川氏が日光廟の工を起す時に範をここにとつたからである。規模の大小は比較に



多武峰十三重塔

權殿

(一)土佐家一派の畫風。その祖は土佐基光である。

もならないが、模型的によくまとまつてゐる、つゝましい美しさはある。十三重の塔は纖麗な線の重疊した感じといひ、古雅な色の落着いた感じといひ、眺めて飽くことがない氣がした。私はそれから向ひ側にある岡にも上つて見た。前日は春の祭があつたさうで、青年たちが御旅所の屋根に葺いた杉葉をおろしてゐた。この岡からは丁度目の高さに、本殿や十三重の塔や、その下に配置された末社や權殿が、松の木の間に眺められる。その風景は、古い土佐派(一)の繪を見るやうな美しさであつた。社殿をちりばめた松の翠のうつとりとした色は、その後の山の茂りに續いて、神々しくも聳えてゐる。

けふも好い天氣ときまつた。私は芭蕉の跡を追うて、ここから吉野へ出ようとして、古地圖なども用意して來たのである。

――芭蕉を尋ねて――

(一)俳人。明治七年松山市に生まれた。斑鳩物語。俳諧師。續俳諧師等の著がある。

泥濘　どろみち。ぬかるみ。

(二)神奈川縣鎌倉郡。由比濱の西北にある一山谷。

自修文

小品二題

高濱虛子(一)

春雨

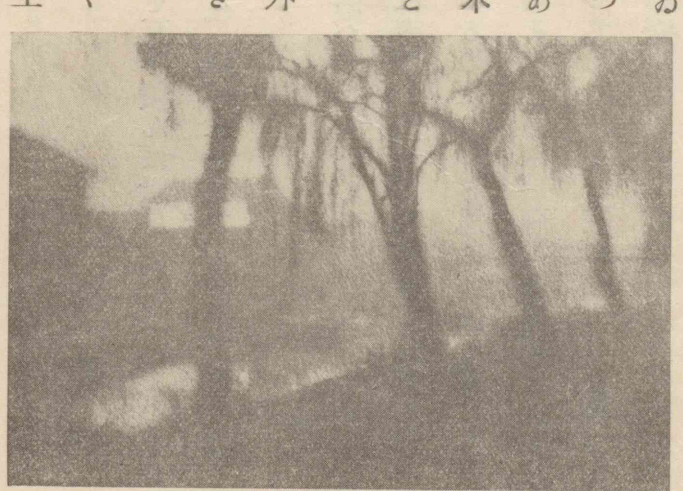
蝙蝠傘を持つて家を出る。門前の途を瓦を積んだ駄馬が行惱んでゐる。途は下駄の齒を沒するばかりの泥濘である。蝙蝠傘をさす。春雨が煙の如く降つてゐるのである。

足駄をひきぬきひきぬき、佐助谷(二)（さすけがやつ）の方へ歩いて行く。

麥畑に白い蝶が飛んでゐる。白い蝶は麥畑の上を、たゞ彼方此方と飛んでゐる。何事を尋ねてかく飛びわたつてゐるのだらうと思ふ。菜の花にも飛んでゐる。菜の花には飛ぶばかりでなくとまつてゐる。羽搏きながらとまつてゐるのが漸く離れ飛ぶ。暫く空中に舞つてゐるがまた花の梢になげつけるやうにとまる。かゝることを何度となく繰返してゐる。蝶には別に棲家といふものがない。西に飛べばその時そこが棲家である。東に飛べばその時そこが

棲家である。時々刻々に變つてゆく。今は隣の畑に移る。また隣の畑に移る。後の山には、所々に山櫻が隱見してゐる。松の樹が並び立つてゐる間に、一つの門が見える。そこは何某氏の別莊であらう。小高く山を登つたところに甍が木の間隱れに見える。鶯の聲がどこからともなく響いてくる。

蝙蝠傘を疊む。煙のやうな春雨は、外套の袖にかゝる。佇むと、川のさゝやきが聞える。



春雨

十坪許りの水溜りが道傍にある。よく見るとここに格別な世界がある。芹が生ひ茂つてゐるのはいいとして、大根の花や菜の花が水中に咲いてゐる。薊の

かなめ垣　かなめを植付けて作つたかき。

花も咲いてゐる。これはこの水溜りに雜草の一かたまりをうち棄てたその中に、大根や菜があつて、それが春に逢うてかく花をつけたものであらう。蝌蚪がその水底に澤山ゐる。その中に白い石が沈んでゐる。その上に數を盡くして群がつてゐる。一寸足音が響くと狼狽して逃げ騷ぐ。

一聲ころと鳴く音がする。すると、あちらからもこちらからも、ころころ、ころころと張合ふ。暫く張合つたがやがて靜かになる。これは蛙であらう。初蛙とでもいふのであらう。

誰の別莊ぞ。數千坪もあらうと思はれる周圍の垣は、かなめ垣になつてゐる。從つてそのかなめ垣も數十間に亙つてゐる。その垣の上に、一面に數十本の櫻が花をつけてゐる。

その前の畑の畦には蠶豆が咲いてゐる。紫色の中に一點黑い色をつけた蠶豆の花が密集してついてゐる。その中に蝶が一匹とまつて、たゝけども覺めぬものの如く食入つてゐる。豌豆の花が一株交つてゐる。薄赤の瓣の下に眞

赤な小さい瓣を垂らしてゐるのが、際立つて目につく。

そこの一枚の田の底が、ごうごうと鳴つてゐるのはどうしたのかと見ると、田の水がむぐらの穴に流れ込んでゐるのである。

一軒の別荘の爺が垣の内に働いてゐるのに聲をかけて、「扇谷（あふぎがやつ）（一）の方に出るトンネルはどこですか。」と聞いたら、「すぐそこです。」と教へてくれた。

少し山の方に這入つて行くと、なるほどトンネルがある。このトンネルは始めて見るのである。家よりさう遠く離れてゐるといふでもないが、今迄格別用事がなかつたので、この邊を通つても氣に止めなかつた。今日始めて通るのである。

トンネルはさう長くない。こんな短いトンネルで扇谷へ抜けられるなら、この佐助谷へも停車場からくるのに便宜だと思ふ。

トンネルの入口では盛んに雨だれが落ちる。雨が岩に浸込んでそれが滴る

（一）鎌倉郡鎌倉町。佐助谷の東北にあたる。

のである。今は目にもとまらぬくらゐの小雨であるが、昨日一昨日の雨の名殘である。

向うの出口でも同じやうに滴る。トンネルを抜けると廣い別荘の横手に出る。

煙のやうな雨がなほ降つてゐる。

樫か榎かの古い大木がある。それにより添うて一本の椿の樹がある。その外にも數株の椿の樹がある。山に散在してゐる。

停車場が見える。

停車場近くの驛長の官舍の前の櫻が滿開である。その櫻の下に引越車が置かれてあるのは、この頃驛長が轉任したが爲であらう。

八幡前（一）の櫻も滿開である。ここに出ると人氣が多い。傘をさした七八人連が通る。

日傘の上に細い雨が降る。

（一）鎌倉町。八幡宮の前。

橋の上に立つて

橋の上に立つ。飯田橋(一)の上に。

梅雨の晴間で薄曇りの空合だ。

下の水は一面に濁つた水だ。

大きな船が一艘橋の下を出てくる。二人の船頭が水棹をあやつつて、肩に棹を當てて腹這ふやうになつて押す。その船は瞬く間に向うへ行く。

大きな船が、一艘左手の倉庫の前に繋がつてゐる。それから板が渡してあつて、一人の男が石炭を荷つては、その板の上を渡つて行く。石炭は船の底に殘り少なになつてゐる。その石炭をシャベルで畚(もつこ)に入れてはそれを荷つて行くのである。

遠くには牛込見附の堤が見える。この堤で限られて、それから向うには船が行かぬので、幾艘かの船が堤の此方にもやつてゐる。ここから見るとや丶遠方になる。

（一）東京市麴町區と牛込區との境。

燕が一羽飛ぶ。それは船をめぐつて水の上をすつて飛ぶ。

濁つた水の上には絶えず波紋が生ずる。それは雨かと思ふと雨ではない。泥の中から泡が生ずるのが、ぶくぶくと水上に出てくるのだ。それが一面に無數に出てくる。

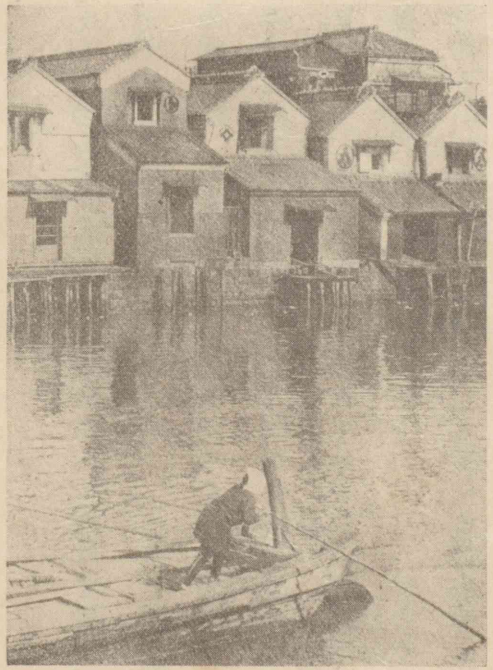
よく見ると今は引潮と見える。少しづつ水が橋の下の方へと流れて行く、流れながらもぶくぶくと絶えず泡が出てゐる。

向うに繋がつてゐる澤山の船には、一人の女がものを洗つてゐるのが見える。それは澤山の船の一番手前の船で、その女は釣瓶で濁つた水を酌上げては、せつせと何かを洗つてゐる。

よく見ると、その澤山の船の周圍には、水棹が林のやうに突立つてゐる。それには船を繋いでゐるのであるが、早速それを利用して横にまた水棹を渡して、それを物干棹にしてゐる。襦袢や着物などが干してある。五六人の男は何をするといふこともなく、篷(とま)の上に腰をおろしてゐる。

また一艘の船が橋の下から現れる。これは何も積んでゐない船で、二人の男は輕さうに水棹をあやつつてゐる。その水棹の尖が泥の中に突込まる、度に、濃い濁りが水上に浮かんでくる。その水棹の影のぶるぶると震へながら水に映るのもよい。

石炭船には今は別に一人の男が倉庫の中から出て來て、暫くシャベルを手に握つたまゝ何か話してゐたが、やがて今度は二人共、せつせと畚に石炭をつめて、交互にそれを運んで行く。橋板が搖れるのを旨く調子を合はせて踏んで行く。



河岸

大變に芥が流れる。流れると言つても少しづつ移動するのだ。竹の皮、バ

ナナの皮、蜜柑の皮、卷煙草の吸殼、水上一面の白い泡。

橋の欄干に凭れてゐる私の傍には、一人の印半纏を着た男が立ちどまる。すぎ去る人は無數、電車も無數に通る。その度に橋が搖れる。

荷車を引いた小僧が、橋の上の人道の方を平氣で通る。一人の中學校の生徒が欄干に凭れた儘で教科書を開けて讀む。

自動車が四五臺橋の上に行きつまる。電車が二三臺並んだ上に、洋紙を載せた車を悠々と引いて行くのに支へられたのだ。やがて笛をやけに鳴らして自動車が徐行し始める。

少し雲が薄らいで薄日がさす。水の上に樣々の影が映る。岸の倉庫の影、橋板の影、船の影、水棹の影、ひらひらと飛んでゐる白い汚れた蝶々の影。

蝶はやがて水際傳ひに飛ぶ。水際には泥が現れてゐてその泥の上には蓆や炭俵の古びたのが黒くなつて埋つてゐる。蝶はその上を縫ふやうにして飛ぶ。

石炭船は漸く石炭を積終る。二人の男は倉庫に這入つた儘で出て來ない。

船は全く無人の儘で横たはつてゐる。この時突然艫の所に女の上半身が現れる。よく見るとそこに四角な所があつてその蓋が取れるやうになつてゐる。最前から取れてゐたのか今取つたのか、それは判らぬ。とにかく女の上半身がすうと現れる。女は手拭を冠つてゐる。それから船ばたに置いてある七輪に炭を入れる。女の上半身は隠れる。

その七輪から煙が立つ。

石炭のない空つぽの船底には薄日が當つてゐる。

私のぼんやりと水上を見てゐる間、橋の袂の石の上には、立ん坊が五人、腕組みをした儘で腰かけてゐて餘り動かない。時々白い歯をむいて私の方を見て笑つてゐるやうな様子に見える。また時々汚れた麥藁帽を冠つた頭を上げて大空を見上げる様子だ。何の爲に見上げるのか判らない。

石炭船の女は現れたりひつこんだりする。その間七輪の煙は益〻濃く立騰る。やがて女は全身を船の上に現した。赤い細帯が目立つ。彼女は船端に突立つて、少し上半身を右の方に曲げて耳の所に手を遣る。彼女は疑もなく最前からぢつとその方を見てゐる私を怪しみ見てゐるのだ。

女はやがて船底に這入つて、上半身を現した儘で私の方を見てゐる。その顔の後に七輪の火が燃えてゐる。

男はまだ倉庫に這入つたぎりで出て來ない。

五　水の上

井上康文(一)

春をめぐんだ太陽の光が、
流ゆるやかな大川の水面に
長閑に輝いてゐる中を、
一艘の荷船が流れるやうにすべつて行く。
長い棹をさした船頭が、

(一) 詩人。名は康治。明治三十年神奈川縣小田原に生まれた。「土に祈る」「深夜」「銀の小鈴」等の外、「童謠民謠集」等の著がある。

兩足にぐつと力を入れて、
からだを前にふんばつて板の上を歩きだすと、
艫に舵を操つてゐる女房の方へ、
だんだん近づいて行く。
女房は男のくるのを笑で迎へながら、
くはへてゐた煙草を口からはなすと、
うすい煙を快ささうに青い空にふいて、
顔の前に歩いて來た男にそれを渡す。
男は煙草を一息ぐつとのんで
棹を起すと、それを引いて船首の方へ行き、
川底深くさしこんで、また力を踏んで歩きだす。
船はさうして流れて行くやうに、
ゆるやかに下流へ進んで行く。

船が進むにつれて、
河岸の大きな倉庫や、
三階建の商館や、廣告塔が靜かに動いて行く。
船のなかほどに四角な窓があり、
それが彼等の家への扉のやうに開かれて、
棚に置かれた鍋や赤土の釜が、
貧しくもつゝましい生活を見せてゐる。
船底に敷かれた赤ちやけた蓆さへ、
彼等にとつては唯一の敷物だ。
彼等はその樂しい住家とともに、その働き場を
問屋の荷揚場から引きはなすと、
大川から大洋へ、

そして次の問屋の倉庫の前へひいて行くのだ。

橋の上を行交ふ電車は、
忽忙として日々の生活に威壓されてゐる人々で一杯だ。
自動車は狂ふやうに警笛を鳴らし、
小僧は往き來の人々を縫ふやうに自轉車を走らせ、
網のやうに張りつめた電線はうなりをたててゐる。
その混亂を外にして、
船頭夫婦は樂しさうに語らひながら、
一本の煙草をのみあつて、
その日その日の生活を、
川から川へ或時は海洋のたゞ中にうつしてゆくのだ。

濁つた川を大海へ進んで行く荷船の
長い影がゆらゆら搖れて、
河岸に寄せる川波のさゝやきが、
騷音のひまにもつれてくる。
川面には雜多な影が映り、
その影が沈むやうに下流へ流される。
そして荷船の夫婦の樂しさうな光景が、
紫色に煙つてゐる橋の下に消えてゆく。

——日本詩集——

六　信濃路の旅

正岡子規(一)

上野より汽車にて橫川(二)に行き、馬車にて碓氷峠(三)を越ゆ。鳥の聲耳もとに落ちて、見上ぐれば千仞の絕壁、百尺の老樹、聳え聳えて天も高からず。樵夫の唄足下に起つて、見おろせば、つたかづらを

(一) 俳人。名は常規。伊豫松山の人。明治三十五年歿、年三十六。今子規全集十五卷がある。
(二) 群馬縣碓氷郡。
(三) 碓氷郡と長野縣北佐久郡との境。

寸馬豆人

あはひ

傳ひて渡るべき谷間に、腥き風さつと吹きどよめきて、萬山自ら震動す。遙かに來し方を見かへるに、山また山峨々として、路いづくにかある。寸馬豆人といへるは彼かとばかり疑はれて、

　つゞら折いく重の峰をわたりきて
　　雲間にひくき山もとの里

日もやゝ暮れかゝれば、四方濛々として、山とも知らず、海とも知らず。驅上る駒の蹄に踏散らす雲霧のあはひを見れば、一歩の外は削りたてたる嶮崖の底も幽かにて、いと怖し。登れども登れども窮る所を知らず。山益、高く、雲愈、低し。

　見あぐれば信濃に續く若葉かな

木曾行脚の子規

輕井澤はさすがに夏なほ寒く、隙間漏る淺間おろしに、一重の

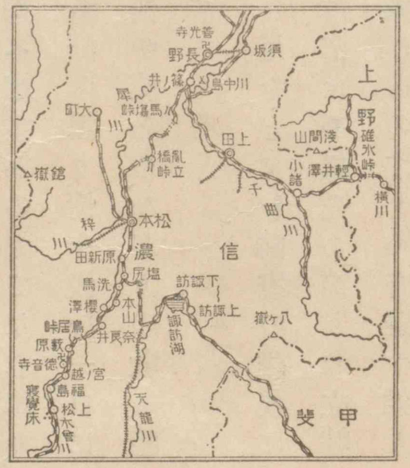
(一)天台宗。長野市の北端。阿彌陀如來をまつる。

旅衣、見果てぬ夢を護るに難かり例ならず疾く起出でて窓を開けば、幾重の山嶺屏風を續らして、草のみ生茂りたれば、その色染めたらんよりも麗し。

　山々は萌葱淺葱やほとゝぎす

淺間は雲に隱れて、煙もいづこにたち迷ふらんと思はる。汽車を驅りて善光寺(一)に詣で、それより川中島を過ぐ。古戰場はいづくのほどとも知らねど、山と山とに圍まれて、犀川のめぐるあたりにやあらん、河の水はいたく痩せて、ほとりの麥畑空しく赤らみたり。

　日はくれぬ雨はふりきぬ旅衣
　　袂かたしきいづくにか寢ん



(一)長野縣更級郡。猿ケ馬場峠といふ。

つとめて

次の日雨晴る。路に立てる芭蕉塚に興を催してたどり行けば、行手遙かに山重れり。野の狹う尖りて、次第次第に入る山路けはしく、弱足に登る馬場峠(一)、さても苦しやと休む足下に、誰が栽ゑしか、珊瑚なす覆盆子(くさいちご)、旅人も採らねばや、こぼるゝばかりなり。少し登りて、とある樹蔭のよしず茶屋に憩へば、主婦のもてなしぶり、谷水を四五町の麓に汲みてもてくる汗の滴り、情を汲む一口に浮世の腸は洗はれたり。一樹の蔭一河の流とや、ひじりの教も時にあうてこそ有難けれ。

この夜は亂橋といふ怪しの小村に足をとゞむ。隣室の雜談に夢覺されて、つとめてここを立出づれば、はや爪先あがりの立峠。旅の若衆と見て取つて、馬子が馬に乘れとのすゝめ。有難や乘りて見れば、旅ほど氣樂なるものはなし。昨日の馬場峠はなぜに苦しみし。路の邊に咲く白き花を何ぞと問へば、「これなんうつぎと

(一)東筑摩郡。松本市の南方。
(二)原新田の南約二里。
(三)洗馬の南一里餘。
(四)西筑摩郡。本山の南一里。
うつゝをぬかす
桃源
(五)櫻澤の南二里餘。
(胡頽子)

申す。」といふ。いとうれしくて、

むら消えし山の白雪來て見れば
駒のあがきにゆらぐ卯の花

峠にて馬を下る。鶯の時ならぬ音に驚かされて、

鶯や野を見おろせば早苗取

松本にて晝餉したゝむ。早く木曾路に入らんことのみ急がれて、原新田(一)まで三里の道を馬車にちゞめて、洗馬(二)(せば)までたどりつき、饅頭にすき腹を肥して、本山(三)の玉木屋に宿る。

本山を出で櫻澤(四)を過ぐれば、ここぞ木曾の山入。山のけしき水の有樣、はや尋常ならぬけはひにうつゝをぬかし、桃源遠からずと獨り勇めば、鳥の聲も耳にたちて珍し。

奈良井(五)の茶屋に憩ひて「ぐみはなきか。」と問へば、「ぐみといふものは知りはべらず。珊瑚實ならば背戸にあり。」といふ。山中に珊瑚、

(一)奈良井の南二十町。藪原へ二十五町。
(二)藪原の南方二里五町。

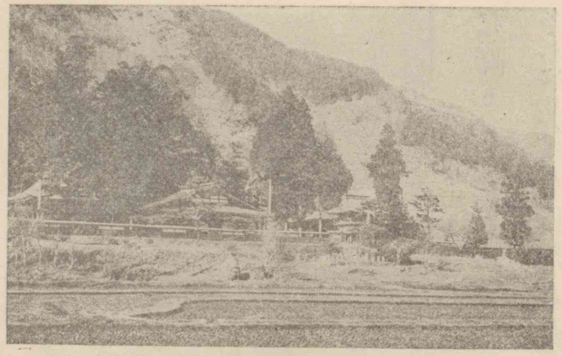
さてもいぶかしと裏に廻れば、やはりぐみなり。あるじの女房深切に採りてくれたり。峽中第一の難所といふ(一)鳥居峠は、若葉の風に夢を薫らせて、痩馬の力におもしろう攀登る。

馬の背や風吹きこぼす椎の花

頂にて馬を下り、つくづく四方を見おろせば、古木鬱蒼、谷深くして、樵夫の小徑微かに隱見す。珍しく晴れわたりたる空の青嵐を踏まへながら山を下れば、藪原の驛なり。或家に立寄りてお六櫛を求む。このほとりよりぞ木曾川に沿うて下るなる。白雪をあやどる山脈は愈、迫りて、かぶせかゝらん勢怖しく、奥山の雪を解かして淸らかなる水は谷を縫うて、その響凄じ。深き淵のたゞ中に、大いなる岩の一つ突出でたる上に、年ふりたる松の枝おもしろく、龍にやあらんと思はれたるもをかし。(二)宮越の村はづれにたたずむほどに、いと古代めきたる翁の釣竿を擔ぎたるが、晝の中

慇懃
(一)壽永年間の建立。
(二)木曾義仲。
(三)宮越城址。木曾義仲の本城。一名山吹城。
(四)德音院殿義山宣公の略。義仲の法名。

よりぞ現れ出でたる。笠をぬぎて慇懃に(一)德音寺への道を問ふ。翁のいふ、「さても優しの若者や。(二)旭將軍のなき跡を弔はんとてや、ここまでは來給へる。ここに茂れる夏木立は八幡の御社なり。かしこの山の上こそ昔の(三)城の址なれ。このわたりの畑も、つはものどもの住みし夢の名殘なるものを、今は桑の木ばかりぞ秀でたる。」と、一つ一つに指さす。そゞろに古をしのぶ言葉のはし、この翁謠ならばかき消すやうに失せぬべし。日照山德音寺に行きて、木曾宣公(四)の碑の石摺一枚を求む。この前の淵を山吹が淵、巴が淵と名づくとかや。福島を今宵の旅枕と定む。木曾第一の繁昌なりとぞ。

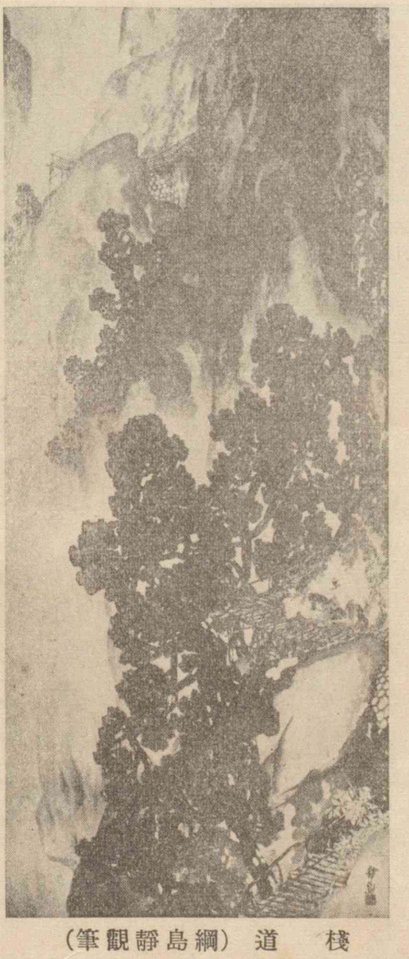

德音寺（中央本堂 右山門兼鐘樓 左義仲の廟所）

（一）福島と上松との間。

翌日朝大雨。待てども晴間なし。傘を購ひ來りて書流す句に、

　をりからの木曾の旅路を五月雨

旅亭を出づれば。雨小やみになりぬ。このひまにと急げば、雨の脚に追ひつかれ、木蔭に憩へば、また降りやむ。とにかくと雨になぶられながら、行き行きて棧(一)に着きたり。見る目危き兩岸の岩の、數十丈の高さに削りなしたるさま、一雙の屏風を押立てたるが如し。神代の昔よりむし重なりた



棧道（綱島靜觀筆）

（一）松尾芭蕉のこと。「かけはしや命をからむつたかづら」の句碑。

る苔の、美しう青みわたれるあはひあはひに、何げなく咲出でたる杜鵑花の麗しさ。狩野派にやあらん、土佐畫にやあらん。下をのぞけば、五月雨に水嵩增したる川の勢渦まく波に雲を流して、突きては割れ、當りては碎くる響、大磐石も動く心地して、うしろの茶屋に入り、床几に腰うちかけて目を瞑ぐに、大地の動き、しばしはやまず。蕉翁(一)の石碑を拜みて、さゝやかなる橋の虹の如き上を渡るに、わが身も空中に浮かぶかと疑はれ、足の裏ひやひやと覺えて、強くもえ踏まず。通り來し方を見わたせば、ここぞ棧のあとと思しきも、今は石を積固めたれば、固より往來の煩もなく、たゞつたかづらの力がましくはひまつはれるばかりぞ、古の面影なるべき。

　昔たれ雲のゆききの跡つけて

　わたしそめけん木曾の棧

上松を過ぐれば、ほどもなく寢覺の里なり。寺に至りて案内を乞へば、小僧絶壁のきりぎはに立ち、遙かの上を指さして、「ここは浦島太郎が龍宮より歸りて後に、釣を垂れし跡なり。川のたゞ中に松の生ひたる大岩を寢覺の床岩、その上の祠を浦島堂とは申すなり。その傍に押立てたる岩を屛風岩、疊み上げたるを疊岩といふ。象岩はその鼻長く、獅子岩はその口廣し。この外、腰掛岩、俎板岩、釜岩、硯岩、烏帽子岩など申すなり。」と、いと殊勝氣にぞしやべりける。

誠やここは天然の庭園にて、松青く、水清く、いづこの工匠か削り成しけん、岩石は峨々として高く低く、或は凹みて渦をなし、或は逼りて瀧をなす。いかさま仙人の住所とも覺えてたふとし。

——獺祭書屋俳話——

蓬莱の松にたて
はやそ根のまつ
其角

七　春の句、夏の句

梅一輪一輪ほどのあたゝかさ　嵐雪
鶯の身をさかさまに初音かな　其角
たこ買つて子心ぞ憂き雨つゞき　召波
春の水ところどころに見ゆるかな　鬼貫

其角筆蹟

清水の上から出たり春の月　許六
矢橋乘る嫁よ娘よ春の風　太祇
あけぼのや菫かたぶく土龍　凡兆
つばくらや小袖を洗ふ橋の下　紫白

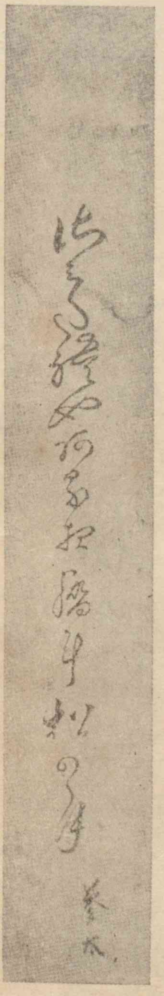
雉子羽うつて琴の緒きれしゆふべかな　星布

雲雀より上にやすらふ峠かな　芭蕉

有明の油ぞのこるほとゝぎす　宗因

ほとゝぎす啼くや木曽路のおそ櫻　素山

夕風や水青鷺のすねをうつ　蕪村



蓼太筆蹟

さみたれやある夜竊に松の月　蓼太

小づまより針ひねり出す袷かな　几董

しづかさや岩にしみ入る蟬の聲　芭蕉

涼しさよ夕立ながら入る日影　去來

唇に墨つく兒の涼みかな　千那

つゝ立つて帆になる袖や涼舟　文草

井戸掘の浮世に出たる暑さかな　也有

草笛の上手つくしぬ夏の月　月居

たうたうと瀧の落ちこむ茂りかな　士朗

八　をりふしの移り變り

吉田兼好(一)

をりふしの移り變るこそ、ものごとに哀なれ。(二)「ものの哀は秋こそまされ。」と人毎にいふめれど、それもさるものにて、今一きは心も浮立つものは、春の景色にこそあめれ。鳥の聲なども殊の外に春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草萌出づる頃より、やゝ春深く霞みわたりて、花もやうやう氣色立つほどこそあれ、をりしも雨風うち續きて、心あわたゞしう散過ぎぬ。青葉になり行くまで、よろづにたゞ心をのみぞ惱ます。花橘は名にこそ負へれ、なほ梅の匂にぞ、古のことも立返り、こひしう思ひ出でらるゝ。山吹の

(一)鎌倉時代の文學者。歌を善くした。徒然草の著がある。正平五年歿、年六十八。

(二)「春はたゞ花のひとへに咲くばかり、もののあはれは秋ぞまされる。」(拾遺集、よみ人知らず)

氣色立つ

名にこそ負へれ

おぼつかなきさましたる
(一) 陰暦四月八日。
(二) 賀茂祭。四月の中の酉の日。
水鶏のたゝく
蚊遣火
(三) 六月晦日の大祓。

清げに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひ棄てがたきこと多し。

灌佛(一)の頃、祭(二)の頃、若葉の梢涼しげに茂りゆくほどこそ、世の哀も人のこひしさもまされと人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月あやめふく頃、早苗とる頃、水鶏のたゝくなど心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるも哀なり。(三)六月ばらへまたをかし。

兼好法師

棚機祭るこそ艶かしけれ。

やうやう夜寒になるほど、雁鳴きてくる頃、萩の下葉色づくほど、わさ田刈干すなど、取集めたることは秋のみぞ多かる。また野分のあしたこそをかしけれ。いひ續くれば、皆源氏物語、枕草子な

今更にいはじとにもあらず
あぢきなし
すさび
かいやり棄つべきもの
遣水
すさまじ
(一) 十二月十九日から二十一日までの三日間宮中で行はれた佛事。
(二) 十陵八墓に幣帛を奉られた使。
やんごとなし
公事
(三) 十二月晦日の鬼やらひ。

どにことふりにたれど、同じこと又今更にいはじとにもあらず。思しきこといはぬは腹ふくるゝわざなれば、筆に任せつゝ、あぢきなきすさびにて、かいやり棄つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。

さて冬枯の景色こそ、秋にはをさをさ劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとゞまりて、霜いと白う置けるあした、遣水より烟の立つこそをかしけれ。

年の暮れはてて、人ごとにいそぎあへる頃ぞ、またなく哀なる。すさまじきものにして、見る人もなき月の、寒けく澄める二十日餘りの空こそ、心細きものなれ。御佛名(一)、荷前(二)の使立つなどぞ、哀にやんごとなき。公事どもしげく、春のいそぎに取重ねて催し行はるゝさまぞいみじきや。

追儺(三)より四方拜に續くこそおもしろけれ。晦の夜いたう闇き

に、松ども點して、夜半過ぐるまで、人の門たゝき走りありきて、何事にかあらん、ことごとしくのゝしりて、足を空に惑ふが、曉方よりさすがに音なくなりぬるこそ、年の名殘も心細けれ。亡き人のくる夜とて魂祭るわざは、この頃都にはなきを、東の方にはなほすることにてありしこそ哀なりしか。かくて明行く空の氣色、きのふに變りたりとは見えねど、引きかへ珍しき心地ぞする。大路のさま松立てわたして、花やかにうれしげなるこそまた哀なれ。

自修文

節供と家庭

倉橋惣三(一)

女の子の爲に三月の雛祭があり、五月端午の節供を男の子の爲にあてて、日本全國津々浦々まで、國中擧つて子供の爲にお祝をするといふことは、誠に趣の深い詩的な年中行事で、子供の爲に大層幸福なことであります。

雛祭も、端午の節供も、子供の爲の祝日ですから、大人の弄ぶ骨董的な性

ことごとし

(一)文學士。東京女子高等師範學校教授。靜岡縣の人。雜草園の著がある。

骨董的　ものずきの意。

質のものでもなければ、風流といふやうな意味のものでもなく、一家が專ら子供の爲に喜ぶといふことが中心にならなければなりません。その歷史的由來がたとひどうであらうとも、新しい意味に於て、わが國に存在する一年に一日の子供日は、さういふやうにありたいのであります。

すべて子供の爲の喜とか祝とかいふやうなことは、家庭的性質のものでなければなりません。かのクリスマスなども、わが國では子供の爲に、家庭內で喜び樂しむといふよりも、社會的傾向を帶びて居りますが、本來は家庭內に於て、一家だんらん、暖かい愛の光に融合ふといふことでなければならぬのであります。

さういふ意味から見て、端午の節供なども、徹頭徹尾、家庭的性質のもので、その中には自ら家族意識或は家庭感情といふものが伴なつて、子供心に家庭とか、家族とかいふ優しい情緒を養ふ爲に有效なのであります。例へば、家內中の人たちが嬉々として武者人形を飾つて下さるとか、或は父や兄が長

社會的傾向　社會の全體に適するやうなかたむき。

愛の光　愛情の惠。

徹頭徹尾　どこからどこまでも。

家族意識　家族といふ氣持。

（幟）

情味　あぢはひ。

堅實　たしかでしつかりしてゐること。

い竿を立てて鯉のぼりをつり上げて下さるとか、一方には母や姉が一所懸命になつて柏餅をこしらへて下さる、その柏餅を包む柏の葉も、裏の山からみんなで取つて來たものであり、柏餅につくる米の粉は、祖母さんが數日前から、せつせと挽臼で挽いて下すつたのだといふやうなところに、いふにいはれぬ家庭的な、そして、教育的な情味を含んでゐるのであります。

お祝が家庭的であるといふことは、祖先を敬つて自分の一家を愛する感じを子供に起させるのに誠に都合がよい。三月の雛祭にしても同じことですが、五月節供の武者人形でも、古くからわが家に傳はつてゐる人形は、土藏から出して來て飾るといふやうなところに、なん等の説明も講釋もせずとも、わが家の古い歴史を尊ぶ感じを與へることができるのであります。

今日の如き時代にあつては、子供にかういふ方面の「わが家」といふ感じが缺けてゐますし、また平素かうした感じを養はせるといふことは、甚だむづかしいのでありますが、かういふ感じを持つといふことは、子供の堅實な

具體的な　實物に據つてまとまつた。

情緒を養ふ上に甚だ有效なことで、且つ必要なことであります。けれども餘り祖先崇拜的な嚴肅な形で子供に强ひることは、その割に效がないのでありますが、かういふ特別な一日の愉快な氣分の中に、わが家の歴史といふやうな感じを與へることができるとすれば、この一日を大いに利用したいもので、この意味からいへば、新しい人形や飾物を澤山買つてやるよりも、古いものを保存して用ひることが、望ましいのであります。

古いものを保存して用ひれば、お節供が年々繰返されてゆくことによつて、子供は自分の生まれた時のいはゆる初節供からの人形が並べられるのを見て、別に説明せずとも、最も愉快な、そして、具體的な自分の生立の感じを味はふことができます。それが爲に、子供は自分の小さい時のことを考へるといふやうな感情的なことはなく、また考へさせるやうではいけませんが、さつぱりした明るい氣持の中に、自分の生まれた時から、親たちがかうして愛して下すつたといふ感じを持つものであります。

現實的　現に實際ある通りの。
寫實的　實物をうつしたやうな。

前に述べた意味を一歩進めると、國家といふ感じを、極めてあどけない子供らしい意味に於て、子供の心に入れることができます。鎧とか、冑とか、太刀とか、武者人形とか五月節供の飾物について、今日の時代では、それを知識的に子供に教へる必要はないかも知れぬが、かういふものほど、極めて自然的に、國家といふ感じを起させるものはない。鎧、冑、武者人形などに對する子供の心持は、極めて具體的な感情に充ちて來て、一種堅實な情緒を養ふことができるのであります。

さういふ意味からして、飾物には昔風のものが好ましいと思ひます。餘り現實的、寫實的意味のものよりも、やはり昔のものがよいと思ひます。必ずしも牛若や、辨慶や、金太郎ばかりを選べといふ意味でなく、さういふものによつて、習慣的に起されてゐるこの日の或感じを保存したいのであります。特にこの日に限つて、かういふ教育を與へねばならぬといふやうな子供に強ひる意味でなしに、この日の價値を認めねばならぬと思ひます。

剛健　しつかりして屈しないこと。
五月晴　五月頃の空の快晴。

それから、別段なんといふわけあひとか理窟とかいふのではありませんが、この日の與へるところの一種獨得な氣分といふものを、理解しまた保存する必要があります。

桃の花咲く長閑な春の一日に、女の子の爲に雛の節供があり、新綠爽かな初夏の一日に、男の子の爲に端午の節供があるといふところに、いふにいはれぬ季節のおもしろみがあります。更に細かく考へて見ますれば、雛祭のどこまでも女性的なのに引換へ、端午の節供は飽くまでも男性的で、一方の草餅、櫻餅には優しい風情がありますが、一方の柏餅や鋭い太刀のやうな菖蒲の葉を用ひる上には、なんとなく男らしい剛健な氣分があります。殊に雛祭は室内的でありますが、端午の節供は戸外に高い鯉のぼりを吹流して、子供にいはゆる五月晴の快活な空を仰がせるといふところに、かうした氣分上の感化のあるのを見のがしてはなりません。

(一)詩人。小説家。名は春樹。明治五年長野縣に生まれた。春。家。破戒。嵐。藤村詩集等の著がある。

佐保姫の春の車駕

九　晩春の別離

島崎藤村(一)

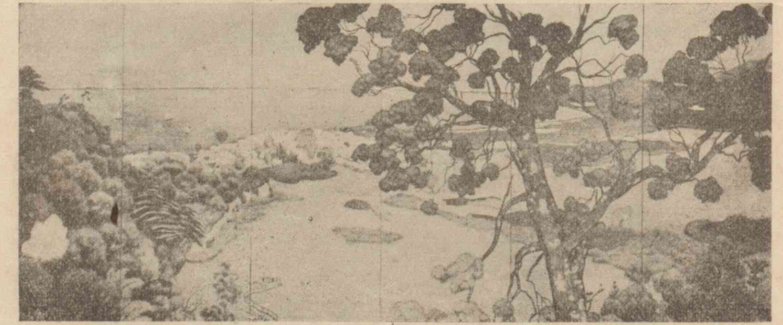
時は暮れゆく春よりぞ
また短きはなかるらん。
恨は友のわかれより
さらに長きはなかるらん。

君をおくりて花ちかき
高樓までも來て見れば、
みどりにまよふ鶯は
霞むなしく鳴きかへり、
しろき光は佐保姫の

湖畔の殘春（池田遙村筆）その一

春の車駕を照らすかな。

これより君は行く雲と
ともに都を立ちいでて、
おもへば琵琶の湖の
岸の光にまよふとき、
ひがし膽吹の山高く、
西には比叡、比良の峰、
日は行きかよふ山々の
ふかきながめを伏仰ぎ、
いかにすぐれし想をか
沈める波にたゝふらん。



湖畔の殘春（池田遙村筆）その二

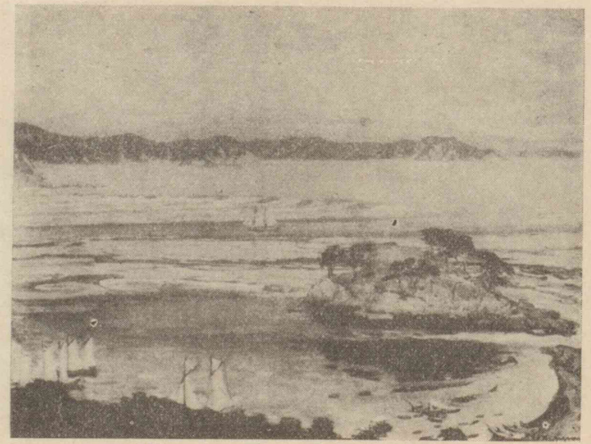
(一)白河法皇。

ながれはむなし、法皇(一)の
夢はるかなる賀茂の水、
水にうつろふ山城の
みやびの都ゆく春の
かすめる姿見つくして、
畿内にせまる伊賀伊勢の
鈴鹿の山の波とほく
海に落つるを望む時、
いかによろづの恨をば、
空行く鷲に窮むらん。

春さりゆかば、青によし
奈良の都に尋ね入り、

としつき君がこひしたふ
御堂のうちに遊ぶ時、
ふるき藝術(たくみ)の花の香の
伽藍の壁にのこりなば、
いかに韻(にほひ)を身にしめて、
深き思にしづむらん。

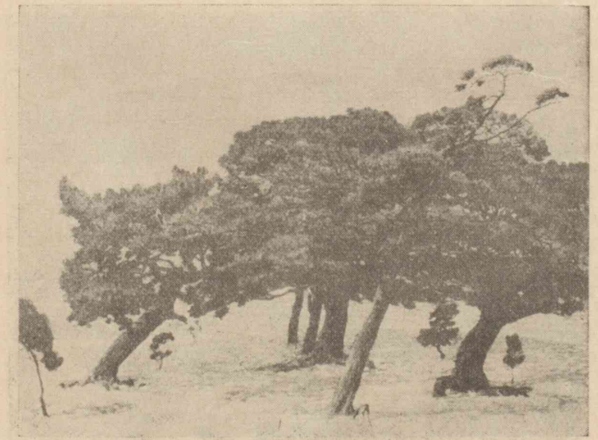
さては秋津の島が根の
南のつばさ紀の國を
めぐりて進む黒潮の、
鳴門に落ちて行く所、
あまぎは遠く白き日の
光をもらす雲裂けて、



阿波の鳴門（中川八郎筆）

目にはるかなる遠海の
波のをどるを望む時、
いかに胸打つ音たかく、
君が血汐のさわぐらん。

または名に負ふ歌枕
波に千とせの色映る
明石の浦の朝ぼらけ、
松よろづよの音にひゞく
舞子の濱のゆふまぐれ、
もしそれ海の雲落ちて、
淡路の島の影くらく、
さ霧のうちに鳴きかよふ



舞子の濱（鹿子木孟郎筆）

千鳥の聲を聞く時は、
いかに浦邊にさすらひて
遠き昔をしのぶらん。

げに君がため山々は
雲を停めん、浦々は
磯にながるゝ白波を
あげんとすらん。よしさらば、
旅路遙かに野邊行かば
野邊のひめごと森行かば
森のひめごと探りもて、
高きに登り、あめつちの
もなかに遊び大川の

明石

朽ちせぬ琴

ながれをきはめ、山々の
神をもよばひ、谷々の
鬼をもおこし、歌人の
魂をも遠く返しつゝ、
清しき聲をうちあげて、
朽ちせぬ琴をかきならせ。

さらば名殘は盡きずとも、
たもとを分つゆふまぐれ、
見よ、影ふかき欄干に、
けむりをふくむ藤の花。
北行く雁はおほ空の
霞に沈み鳴きかへり、

鈴　鹿　山（鈴鹿權現）

彩なす雲も愁へつゝ、
君を送るに似たりけり。

あゝいつかまた相逢うて
もとの契をあたゝめん。
梅も櫻も散りはてて、
すでに柳は深みどり。
人はあかねど、ゆく春を
いつまでここに留むべき。
われに惜しむな、家づとの
一枚の筆の花の色香を。

——藤村詩集——

(一)後醍醐天皇の延元元年(一九九六年)五月、九州の大軍を率ゐて東上した。
機に乘る
驅合はす
決定

一〇　櫻井の驛

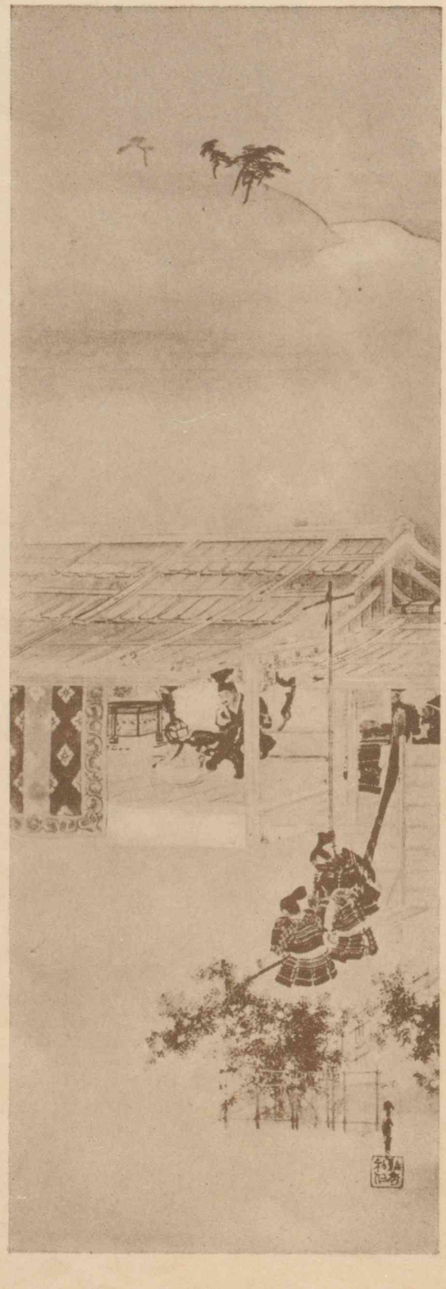
尊氏卿直義朝臣大勢を率して上洛(一)の間、要害の地に於て防ぎ戰はん爲に、兵庫に引退きぬる由、義貞朝臣早馬を參らせて、內裏に奏聞ありければ、主上大いに御騷ぎあつて、楠木判官正成を召されて、「急ぎ兵庫に罷り下り、義貞に力を合はせて合戰すべし。」と仰せられければ、正成畏まつて奏しけるは、「尊氏卿すでに筑紫九國の勢を率して上洛候ふなれば、定めて勢は雲霞の如くにぞ候ふらん。身方の疲れたる小勢を以て、敵の機に乘つたる大勢に驅合はせて、尋常の如くに合戰をいたし候はば、身方決定打負け候ひなんと覺え候ふなれば、新田殿をもたゞ京都へ召し候ひて、前の如く山門へ臨幸なり候ふべし。正成も河內に罷り下り候うて、畿內の勢を以て河尻を差塞ぎ、兩方より京都を攻めて、兵粮を疲

搦手
了簡
とてもかくても
勅答
僉議
(一)左大辨參議。
節度使
(二)延元元年正月、尊氏の上洛をさけて行幸なされた。

らかし候ふほどならば、敵は次第に疲れて落下り、身方は日々に隨つて馳集り候ふべし。その時に當つて、新田殿は山門より押寄せられ、正成は搦手にて攻上り候はば、朝敵を一戰に滅さんことありぬと覺え候。新田殿も定めてこの了簡候ひなん。たゞ路次にて一軍もせざらんは、無下にいふがひなく人の思はんずるところを耻ぢて、兵庫に支へられたりと覺え候。合戰はとてもかくても、始終の勝こそ肝要にて候へ。よくよく遠慮を廻らされて、公議を定めらるべきにて候。」と勅答せられけり。

されば列座の諸卿いづれも「誠に軍旅のことは兵に讓られよ。」と僉議ありけるに、重ねて(一)坊門宰相清忠申されけるは、「正成が申すところもその謂ありと雖も、征伐の爲に差下されたる節度使、未だ戰を爲さざる前に帝都を棄てて、(二)一年の內に二度まで山門へ臨幸ならんこと、かつは帝位の輕きに似、または官軍の道を失

櫻井の驛



谷口香嶠筆

鈇鉞

庭訓

ふところなり。たとひ尊氏筑紫勢を率して上洛すとも、去年東八箇國を順へて上りし時の勢にはよも過ぎじ。凡そ戰の初より敵軍敗北の時に至るまで、身方小勢なりと雖も、毎度大敵を攻靡けずといふことなし。これ全く武略の勝れたるところにはあらず。たゞ聖運の天にかなへる故なり。されば、たゞ戰を帝都の外に決して、敵を鈇鉞の下に滅さんこと、なんの仔細かあるべきなれば、たゞ時をかへず、楠木罷り下るべし。」とぞ仰せ出されける。

正成「この上はさのみ異議を申すに及ばず。」とて、五月十六日に都を立ちて、五百餘騎にて兵庫へぞ下りける。正成これを最後の合戰と思ひければ、嫡子正行が今年十一歳にて供したりけるを、思ふやうありとて、櫻井の宿より河内へ返し遣すとて、庭訓を遺しけるは、「獅子子を產んで三日を經る時、數千丈の石壁よりこれをなぐ。その子獅子の氣分あれば、教へざるに宙より跳ねかへり

て、死なずといへり。況や汝すでに十歳に餘りぬ。一言耳にとゞまらば、わが教誡に違ふことなかれ。今度の合戰天下の安否と思ふ間、今生にて汝が顏を見んこと、これを限りと思ふなり。正成すでに討死すと聞きなば、天下は必ず將軍の代に成りなんとおぼえたり。さりとも一旦の身命を助からん爲に、多年の忠烈を失うて降人に出づることあるべからず。一族若黨の一人も死にのこりてあらんほどは、金剛山の邊に引籠つて、敵寄せ來らば命を養由(一)が矢さきに懸けて、義を紀信(二)が忠に比すべし。これぞ汝が第一の孝行ならんずる。」と、泣く泣く申し含めて、各東西へ別れにけり。

昔の百里奚(三)は穆公晉の國を伐ちし時、戰の利なからんことを鑑て、その將孟明視(四)に向かつて今を限りの別を悲しみ、今の楠木判官は、敵軍都の西に近づくと聞きしより、國必ず滅びんことを愁ひて、その子正行を留めて、なき後までの義を勸む。彼は異國の

忠烈

若黨

(一) 支那古代の弓の名人。百歩はなれた柳の葉を射て百發百中したといふ。

(二) 漢の高祖の臣。高祖が項羽に圍まれて危かつた時、身代りとなつてこれを助けた人。

(三) 秦の穆公に仕へた人。

(四) 百里奚の子。

良弼
一揆

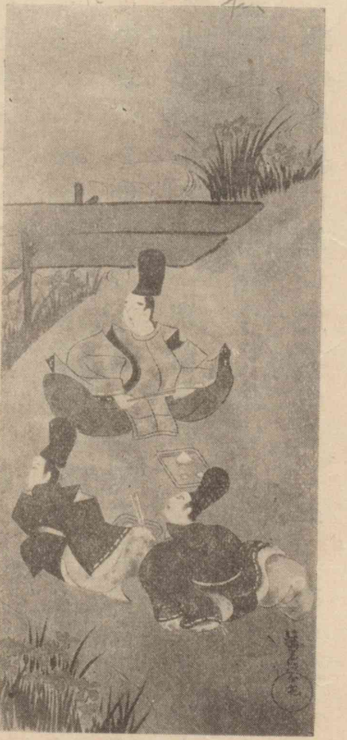
(一)碧海郡。知立町の東。

良弼、これはわが朝の忠臣、千載を隔つと雖も、前聖後聖一揆にして、有難かりし賢佐なり。

——太平記——

二　東下り

昔、男ありけり。その男、身を益なきものに思ひなして、京にはあらじ東の方にすむべき國もとめにとて行きけり。もとより友とする人、一人二人して行きけり。道知れる人もなくて惑ひ行きけり。(一)三河國八橋といふ所に至りぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河のくも手なれば、橋を八つ渡せ



八橋（尾形光琳筆）

かれひ

(一)安倍郡と志太郡との境。

るによりてなん八橋とはいひける。その澤の邊の木の蔭におりゐて、餉くひけり。その澤にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見て或人のいはく、「かきつばたといふ五文字を句の上にすゑて、旅の心を詠め。」といひければ、詠める、

唐衣きつゝ馴れにしつましあれば
はるばる來ぬる旅をしぞ思ふ

と詠めりければ、皆人、餉の上に涙落してほとびにけり。行き行きて駿河國に至りぬ。(一)宇津の山に至りて、わが入らんとする道は、いと暗う細きに、つた、かづらは茂り、もの心細く、すゞろなるめを見ることと思ふに、修行者あひたり。「かゝる道にはいかでかおはする。」といふに見れば、見し人なりけり。京にその人の御許にとて、文書きてつく。

駿河なるうつの山邊のうつゝにも

鹽尻

富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いと白う降れり。

　時しらぬ山はふじの嶺いつとてか
　　かのこまだらに雪の降るらん

在原業平（不退寺藏）

その山は、ここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらんほどして、なりは鹽尻のやうになんありける。なほ行き行きて、武藏國と下總國とのなかに、いと大きなる河あり、それを角田河といふ。その河の邊に群れゐて思ひやれば、かぎりなく遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡守、「はや舟に乘れ。日も暮れなん。」といふに、乘りて渡らんとするに、皆人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さるをりしも、白き鳥の嘴と脚とあかき、しぎの大きさなる、水の上に遊びつゝ魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人え知らず。渡守に問ひければ、「これなん都鳥。」といふを聞きて、

　名にしおはばいざこと問はん都鳥
　　わが思ふ人はありやなしやと

と詠みければ、舟こぞりて泣きにけり。

—伊勢物語—

一二　をさな兒

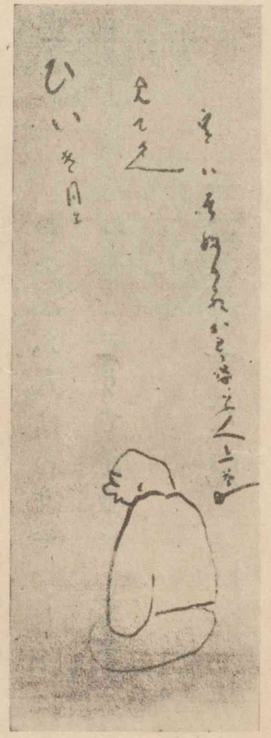
小林一茶(一)

こぞの夏、竹植うる日(二)の頃、うき節しげきうき世に生まれたる娘、ものに敏かれとて、名をさととよぶ。ことし誕生日祝ふころほひより、手うち手うちあはゝ、天窓てんてん、かぶりかぶりふりながら、同じき子供の風車といふもの持てるを、しきりにほしがりてむづかれば、とみに取らせけるに、やがてむしやむしやしやぶ

(一) 俳人。信濃の人。俳諧寺と號した。俳人。通稱彌太郎。一茶發句集。おらが春の著がある。文政十年歿、年六十五。

(二) 五月十三日のこと。支那では竹醉日とてこの日に竹を植うれば枯れないといふ。

つて棄て、露ほどの執念なく、直ちにほかのものに心うつりて、そこらにある茶碗をうち破りつゝ、それも直ちに倦みて、障子の薄紙をめりめりむしるに、「よくした。よくした。」と褒むれば、誠と思ひ、けらけらと笑ひて、ひたむしりにむしりぬ。心のうち一點の塵もなく、名月のきらきらしく清く見ゆれば、なかなかに心の皺も伸ばしぬ。



一茶自畫像

また人の來りて「わんわんはどこに。」といへば犬に指さし、「かあかあは。」と問へば鳥に指さすさま、口もとより爪先まで愛敬こぼれて愛らしく、春の初草に胡蝶の戯るゝよりも優しくなん覺ゆる。

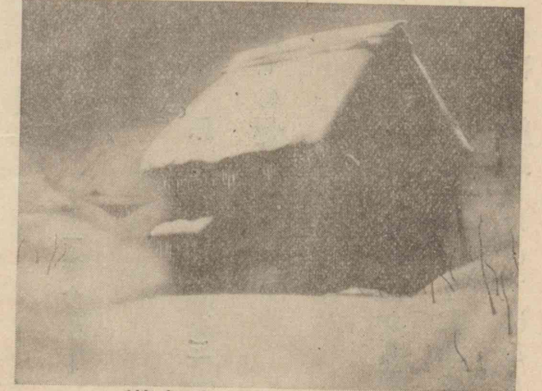
をりから門に月さしていと涼しく、外にわらはべの踊の聲の

振分髪

小鹿の角のつかの間

すれば、直ちに物投棄てて、片ゐざりにゐざり出でて、聲をあげ、手眞似して、うれしげなるを見るにつけ、いつしか彼をも振分髪のたけになして、踊らせたらんには、二十五菩薩の管絃よりも遙かに勝りて興あるわざならんと、わが身に積る老を忘れて、憂さをなん晴しける。

かく日すがら、小鹿の角のつかの間も、手足を動かさずといふことなくて、遊び疲るればにや、朝は日のたくるまで眠る。そのうちばかり母は飯炊ぎ、そこら掃きかたづけて、やがて閨に泣聲のするを目の覺むる相圖と定め、手がしこくも抱起して、乳房あてがへば、すはすはと吸ひながら、胸板のあたりをうちたゝきて、



一茶の家（兒玉素行筆）

にこにこ笑顔をつくるに、母は長き胎内の苦みも、日々のむつきの穢はしきもうち忘れて、掌の中の玉と撫でさすりて、一人喜ぶなりけり。

のみのあと數へながらに添乳かな

――一茶全集――

自修文

子等と共に

原田讓二(一)

鉦鳴らし信濃の國を行きゆかばありしながらの母見るらんか。(空穗)

私は信州にはいるたびに、この歌を想ひ出すのである。汽車の窓から野や山を見てゐると、そこに小さい巡禮の姿があらうがあるまいが、うたふやうな、悲しいやうな氣持になつて、口のうちでこの歌を繰返さないではゐられない。私に母がないのではない。母はまだ健かである。幼い時の境遇がさうであつたかといふに、さうでもない。たゞ青年時に讀耽つた詩の記憶が、しめやかに私をして母を懷かしめるのである。むづかしい學科などは忘れてしまつても、詩だけは心の培ひになつて殘つてゐるのだ。

(襁褓)

(蚤)

(一) 大阪朝日新聞整理部長。大正十二年外國から歸り、同年八月信州田澤溫泉に遊んだ。

しめやかに　ものしづかに。

子供等は皆山へ行く。子供等の山を慕ふ心は、大人には測り知れない。そこには山百合や、釣鐘草や、なでしこや、その他名も知れない珍しい草花が彼等を待つてゐる。路端の草むらからは、生まれたばかりのやうな青い小蛙が飛出す。野生の蜜蜂がうなる。赤蜻蛉が目に見えぬ絲で操られるやうに飛んで行く。草家の軒に枝をのばした柿の實はまだ青い。栗の木の葉蔭に隱れた栗の實も、青いいがを鎧つてゐる。かういふものは、東京に生まれた彼等には、悉く目新しい未知な世界だ。(一)島崎さんの「ふるさと」といふ書物を携へて來た彼等は、同じ信濃の國へ來て、その書物の中のことを、ありのまゝに味はふやうな氣がしてゐるだらう。

山から歸つてくると、ひとしきり騷がしいことだ。一かゝへもある草花を

(瞿麥)

草家　草でふいた家。

鎧ふ　着てゐる。鋭くて鎧のやうであるのでいふ。

(一) 島崎藤村のこと。藤村は長野縣西筑摩郡馬籠村の生。

殘骸　しがい。

信濃の山路（寺崎廣業筆）その一

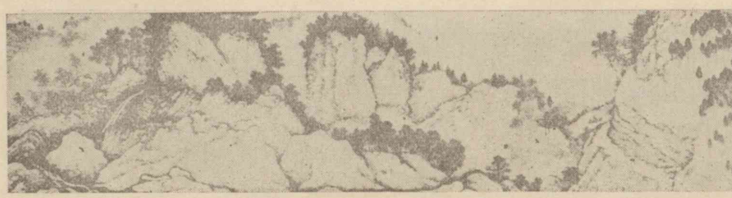
そこの縁側へ取散らして、標本だの押花だのといつて、妹は姉の眞似をする。中には百姓に抜いてもらつたといふ長い長い根こそぎの鬼百合もある。草花の生命を土から斷つてしまつたといふやうなことを、彼等は少しも考へない。これほど騒いで置きながら、いつしか忘れてしまふから、朝採つた花は、夕には哀な殘骸となつて、萎れてしまふ。それでもまた翌朝は、勇んで花を採りに行く。

ここの山には蛇はゐないといふこと、誰かがきのふ栗鼠を見たこと、同じ宿のお友だちが蜂にさされた話、溪川へおりて清水を飲んだが、蛙の卵はゐないだらうかとか、そこの小石を動かしたら蟹が出たとか、子供等の山の土産話は盡きない。父親であるところの私は、彼等が汗を拭き拭き先を競うてこれ等のことを報告するのを、一々聞かなければならなかつた。

祝福　他人の幸福をよろこびねがふこと。

かけひ（筧）　水を引く爲にかけわたしたとひ。

私はどうだらう　妻はせつかく避暑に來ても、東京にゐる時のやうに毎日働いてゐるのに、自分はなまけてゐると、自分で自分を責めたのである。


信濃の山路（寺崎廣業筆）その二

東京にゐて街から歸つた時と、かうして山から歸つて來た時とは、子供の顔がすつかり違つてゐる。そして、その汗までが違ふ。私の胸は子供の健康を祝福する心で一ぱいである。

子供を山にやつてから、妻は涼しいうちにといつて、よく洗濯に出かけた。この三階にゐて寝そべつた儘、私は遠くに妻の洗濯する姿を見ることが出來る。宿屋の庭の山に迫つた崖の下で、かけひの水をたらひに受けながら、かの女は働いてゐる。私たちの生活は、場所を移動させたばかりだ。妻はここに來ても、やはり日課を續けてゐる。私はどうだらう。

すぐ目の下に一軒の駐在所がある、恰も寂しいこの温泉場を保護するやうに。その家の奥さんは、晝間は子供の守

影繪　あかりで障子や襖などに大きくうつした影。

生活の云々　同じやうな生活をしてゐるとの意。

せゝらぎ　瀨の淺い小流。

信濃の山路（寺崎廣業筆）その三

をしながら讀書してゐた、或時は自分の家の緣先で、時にはまた前の農家の廣庭の木蔭で。その庭には繭が干してあつた。鷄が平籠の上に飛上つて、眞白な繭玉を覆したこともあつた。

夕暮になると、主人の警官は、自轉車を押しながら坂路を歸つて來た。私は夜の散歩の時に、駐在所の涼しさうな簾越しに、睦まじさうに晩餐をとる夫婦の姿を影繪のやうに眺めて、我知らずほゝゑんだこともある。

私たちはこの人たちの生活の友だちである。

夜はせゝらぎの音が、雨ではないかと疑はれるほど、寢覺の耳を驚かす。農夫は作物と同じ心になつて、田に畑に水を欲してやまないのだが、ここにはかくも水の音が豊か

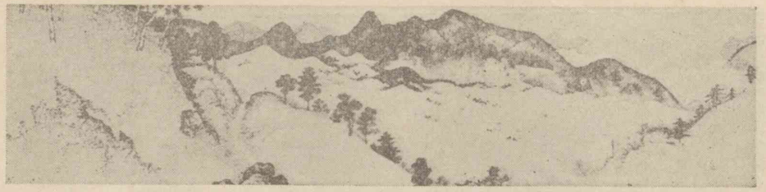
賦す　詩などを作る。

(一)信濃の人。德川末期の志士。元治元年（二五二四年）歿、年五十四。

(二)長野縣小縣郡青木村。海拔七〇〇メートルの山腹にある。

草徑　草でおほはれた小道。

全山を領す　山全體を占領する。

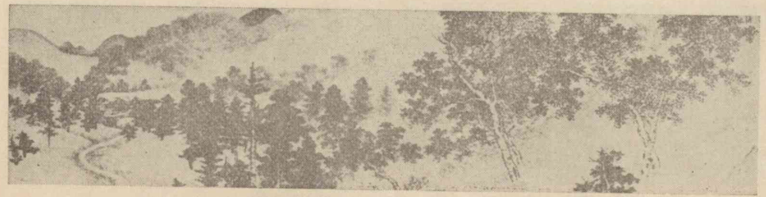


信濃の山路（寺崎廣業筆）その四

である。かういつて農夫に話すと、彼はたゞ笑ふであらう。なんとなれば、これくらゐな水では、とても農作物には足りないからである。閑人の耳の風流と、力と汗の實用とには、甚しい隔りがあるのだ。「白石清泉夢に入る頻りなり。」と賦して、(一)佐久間象山は故郷を懷かしんでゐるが、信州の自然には、かういふ趣がある。(二)田澤も小さいながら、これだけの景趣は具へてゐた。

私は一日子供等に誘はれて、溪川を上へ上へと遡つて行つた、草徑はいつか森の中に入つて、日光を遮つた。子供等が水に下りて行つた間、私はそこらの切株に腰をおろして涼を入れた。木の枝の間から湧いてくる冷々した山氣が、皮膚を刺すやうであつた。鶯が鳴く。鶯が鳴く。朗かな、轉ばすやうな鶯の聲が、全山を領して響く。都會生活に馴

(一) Concrete.（混凝土）セメントと砂とに水を加へてねり合はせて作つた人造石。



信濃の山路（寺崎廣業筆）その五

れた私が、一つの不思議を見出したやうに、聲の所在を探らうとして、眼を轉々とさせた樣子は、さぞをかしかつたことだらう。

「水が濁つた。」

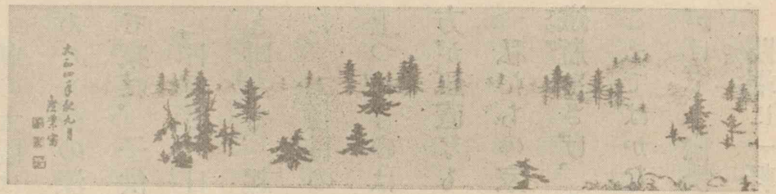
子供たちが不意に叫んだ。雜草を分けて、丸い石の上に下立つと、いかにも上から流れてくる水は、染分けたやうに濁つてゐた。小さい淀みには、みづすましがくるくる舞つてゐた。

私たちは濁の原因を探しに、更に上つて行つた。

二三の若者が砂利を探つてゐるのだ。こんな狹い溪川から砂利をすくふのか。その砂利をどうするのかと聞いたら、宿屋の建築に用ひるコンクリート(一)を造るのだといつた。文明がかうして山奥に侵入するのである。

平調　平凡なおもむき。

空濶　ひろびろとしてゐること。



信濃の山路（寺崎廣業筆）その六

宿の樓上からの展望は平調で、しかもさまで空濶といふでもなかつたが、山村の趣は十分にあつた。私は寢ながら雲の姿を眺めた。印度洋で船の籐椅子に長くなつて見た以來の雲であつた。時にはまたあたりの連山をこめて、銀箭を注ぐやうな夕立をも見た。夜は電燈を消して、疊の上をはふ月の光を懷かしんだ。

一昨年とかに開通したといふ一筋の白い街道が、山間の村落を縫うて、下り坂になつてゐる。いつしかそれがどこかで曲つてしまふ。空の彼方には、太郎山と呼ばれる山が、うつすらと線を劃してゐる。夕暮近くなると、山の色が變つてくる。そして、村落の影が底へ底へと沈んでゆく。やがて青田の中から、地上の星のやうに家々の灯が生まれる。

（一）Crayon.

道程　みちのり。

朝の太陽は太郎山の右手から昇つた。或朝、私は欄干に出て、まだ眠つてゐるもやの深い蒼茫たる外景に對してゐると、俄にそのあたりが紅く染まつて來た。子供等はかねて日の出が見たいと望んでゐたから、

「日の出。日の出。」

と叫んで、起してやつた。彼等は一齊に蚊帳を飛出して、眠たい眼をこすつた。二番目の女の子は、早速クレイヨン（一）を取出して、寫生にかゝつた。出來上つたものは、漫畫の太陽の如くであつたが、私がペンでかくよりも、その方が正直なものであつたらう。

私たちの家族は夕方になるのを待ちわびて、清水を汲みに行つた。一人は鐵瓶をさげ、誰かが末の子を負うたり抱いたりして、その街道を下つた。そこまではかなりの道程があつたから、よい散歩になつた。ほかの浴客も浴衣がけで、愉快に語りながら、この清水汲を日課にした。

路端に一軒の水車小舍があつたが、そこを通りかゝると、末の子は「お國は恐い。」といつて、母の胸に顏を隱すのである。皆はおもしろがつて笑ふけれど、この子の身になつて見れば、いつか母の鄕里に連れて行かれて、水車は恐いものと教へられた、その幼い記憶におびえてゐるのである。

道すがら　道を歩いてゐながら。

いつか雨乞のあつた夜、私たちには不思議な土地の風習を見たのも、この道すがらであつた。つい目前に聳えてゐる嶮しい山頂へ、いくつもの松明の火が、百足のはふやうに登つて行つた。暗い夜の山の火は、神祕の恐しさを感じさせた。

愈〻歸らうとする朝、子供等は大事な土產物をどこかへ置忘れたといつて、大變な騷だつた。正直な宿の主人夫婦は、一緒になつて騷いで、たうとう探し出してくれた。それは山から採取した苔を罐詰の空に入れたものであつた。主人は名もない客の爲に、無價値な忘物の爲に、來年も、來々年もこんな騷をするだらうか。

田澤よ、さやうならの心持は、子も親も同一であつた。この朝は信州にも

(一)上田市。田澤から四里。
(二)原田讓二著。大正十五年日本評論社發行。

けいめい

珍しいといふ深い霧雨が、高原をこめてゐた。自動車はその中を上田(一)へ。顔はしつとりとぬれる。子供等は頭から毛布をかぶつた。

——歐米新聞遍路(二)——

一三　松下禪尼と最明寺入道

吉田兼好

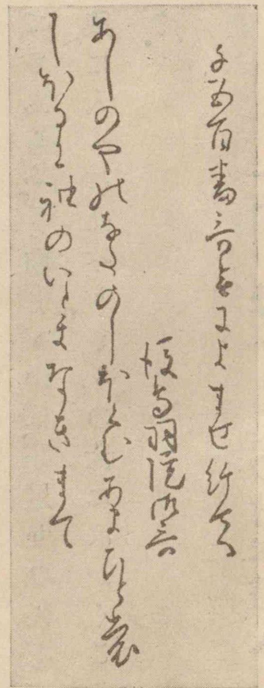
一　松下禪尼

相模守時頼の母は、松下禪尼とぞ申しける。守をいれ申さるゝことありけるに、すゝけたる明障子のやぶればかりを、禪尼手づから小刀して切りまはしつゝ張られければ、兄の城介義景、その日のけいめいして候ひけるが、「賜はりてなにがし男に張らせ候はん。さやうのことに心得たるものに候。」と申されければ、「その男、尼が細工によもまさりはべらじ。」とて、なほ一間づつ張られけるを、義景「皆を張りかへ候はんは、遙かにたやすく候ふべし。斑に候ふも見苦しくや。」と重ねて申されければ、「尼も後はさわさわと張

(一)千五百番歌會によませ給ひける　後鳥羽院御歌
あしのやのなたのしほくむあまひともしほるに袖のいとまなきまて

ことやう

りかへんと思へども、けふばかりはわざとかくてあるべきなり。ものは破れたる所ばかりを修理して用ふることぞと、若き人に見ならはせて、心づけん爲なり。」と申されける、いと有難かりけり。世を治むる道、儉約を本とす。女性なれども聖人の心に通へり。天下をたもつほどの人を子にてもたれける、誠にたゞ人にはあらざりけると。



傳兼好筆

二　最明寺入道

平宣時朝臣、老ののち昔語に、「最明寺入道或宵の間によばるゝことありしに、「やがて」と申しながら、直垂のなくてとかくせしほどに、また使來りて「直垂なんどのさふらはぬにや。夜なればことやうなりとも疾く。」とありしかば、なえたる直垂、うちうちのまゝ

にて罷りたりしに、銚子に土器取添へてもて出でて、『この酒をひとりたうべんがさうざうしければ申しつるなり。肴こそなけれ。人はしづまりぬらん。さりぬべきものやあるといづくまでも求め給へ。』とありしかば、紙燭さして、くまぐまを求めしほどに、臺所の棚に、小土器に味噌の少しつきたるを見出でて、『これぞ求め得てさふらふ。』と申しゝかば、事足りなんとて、心よく數獻に及びて、興に入られはべりき。その世にはかくこそはべりしか。』と申されき。

――徒然草――

一四　母としての日本婦人

鶴見祐輔(一)

世界の國々を旅したドイツの哲學者カイゼルリンク伯が、日本に來ての數々の印象のうちに、彼は日本の婦人を禮讃して、世界の女性のうちで、完全に近きものありとすれば、それは日本の

たうぶ
さうざうし
紙燭

(一)政治家。群馬縣の人。三都物語。南洋遊記。思想山水人物。小説母等の著がある。

女性であると言つた。

同じやうなことを、ラフカーディオ・ハーン(一)が、曾て世界に向かつて言つた。

さういふ頌德の碑文を捧げてゐる日本の婦人たちだ。日本の男性は未だ曾て、そんな讃辭を、世界の誰人からもうけたことはない。たゞ日本の女性だけが、時折りかゝる禮讃を受けてゐるのだ。

その理由は色々あらう。然し何人も認めざるを得ないことは、少くとも日本の女性は、世界の女性と異つてゐるといふことだ。世界中を旅行した人々に聞いて見る、あなたは日本で何から一番深い印象を受けましたか、と。その答の十中七八は、きつと日本の婦人たちといふ。

その理由は、人によつてみんな違ふ。

(一)Lafcadio Hearn, もと英國人で歸化して小泉八雲といつた。

頌德

陶醉

ある人々は、美しき日本のキモノに牽かれる。世界のいづこにも類例のない日本婦人の衣裳に陶醉する。自分もあゝいふ美しい衣裳を身につけたいと大勢の外國の婦人たちが冀ふ。

ある人々は、日本の婦人の身のこなしに、神往する。青疊の上に、白い障子を背景にして座蒲團の上に、かうしとやかに坐つた日本の婦人たちの姿に驚く。さうして自分たちの身のこなしが、野蠻人のやうであるのを今更のごとく羞ぢる。

ある人々は、日本の婦人の表情に心醉する。それは一見無表情であつて、しかも、仔細に見れば、二千五百年の教養の流露である。寶玉は薄絹に包んで、却つてその洩れる光の床しきがごとく、內に溢るゝ純情を、靜かに抑へて端然としてゐるところに、日本婦人の調和と平和との心境が味讀される。

ある人々は、日本婦人の心づくしに感歎する。陽に虛禮を避け

德操

て、陰に溫情の流露をつとめんとする、日本の婦道に動かされる。それ等の一切が、心ある外客をして、日本の女性を禮讃せしめた理由である。それは多くの場合に、自國に於て失はれんとしつつある德操と美とを、外國に發見せんと試みる人間性の一面でもある。他人庭上の花を美しとする心境でもある。然し、これを印度に求めず、支那に求めず、アメリカに求めず、ドイツに求めずして、日本に發見するところに、日本の特色がある。

世界の人々から、かゝる讃辭を受け、かゝる興味の中心となつてゐる日本の女性は、ある純清な責任をもつてゐるものである。その期待に反くまいといふ向上心、その評價を裏切りたくないといふ自重心が生まれてこなければならぬわけだ。さういふところに我々は、美しき國際競爭心を發見する。

國民と國民とが、異る特色を具有して、別々の文化を築いてゆ

くところに、大きい世界文明の完成が約束せられるものとするならば、日本民族が、世界文明の大殿堂に對する大きい貢獻の一つは、日本女性の完成の方向にも、これが見出される。

今までの日本は太平洋といふ大きい海の懷のうちに、しつかとかき抱かれてゐた祕藏息子であつた。愈〻この太平洋時代といふ素晴しい時代が到來して、日本が滿身に脚光を浴びて、世界の檜舞臺に登場する日が來た。その日に、今まで日本が默々と培ひ育ててきた德操と文化と藝術とが、世界の眼の前に展開せられるのだ。

その時に、今まで世界の視聽から隱れて、つゝましやかに部屋の一隅に坐つてゐた日本の女性たちが、一齊にこのまばゆき脚光のうちに映し出されるのだ。

さういふ晴れがましい日が、刻一刻と、日本の女性の一人一人

脚光 Footlight. の譯語。

の前に歩み寄りつゝある。

この準備は、いま日本の女性のうちに出來てゐるのか。

一切の偉大なるものは、悲しみと苦しみとのうちから生まれた。

善なるものも、美なるものも、眞なるものも、すべては無代價では與へられない。人類はこれに向かつて、深刻なる對價を拂つてゐる。その對價は血であり、涙であつた。長き夜を泣明したるものにあらずんば、未だ共に人生を語るに足らず、とカーライルの言つたやうに、何等かの苦惱を經驗したものでなくては、貴き何物をも所有してゐないのだ。

悲しむことと苦しむことは、我々の好むところではない。然し、かかる人生の苦き杯を底まで飮み乾す勇氣のあるものでなくしては、生きて甲斐ある人間の生活には觸れられない。かゝる意味

把握

に於て、悲しむこと、苦しむことは、人生の恩寵である。

然し、それはある光明に到達し、ある人生觀を把握し得たる時にのみ我々の恩寵たり慶福たるを得るのである。たゞ空しく悲しみ、たゞ空しく苦しむことは、人生悲慘事中の一大悲慘事である。

我々は如何にして、苦惱より、光明に拔出で、涙より笑の門に入るべきや。それが、日夜、我々の眼前にある嚴肅なる問題である。

それは永久に我々が、希望を抛たないことである。我々の生について絶望しないことである。我々今日の苦痛は、必ず明日の幸福の因たることを、深く信ずる心をもつことである。

想ふに日本の女性が、カイゼルリンクと、ハーンとの歎賞を博したのは、日本の女性たちが、永い間惱みぬき、苦しみぬいてきた結果である。ほゝゑみつゝ苦しみを忍んできた日本婦人の靈の

うちに、ある高貴なる光が輝いてゐて、それが直觀力鋭き人々の眼に映じたのである。

即ち、今日の日本女性の美と德とは、たゞ無代價に天から降つてきたものではなくして、二千五百年來の涙の結晶である。

その涙を、最も多く日本の女性が流してきたのは、娘としてでもなく、妻としてでもなく、公人としてでもなく、實は母としてであると、私は固く信じる。

日本人に偉大ありとせば、それは母たる日本女性の賜物である。

我々がこの世の中に生存し、社會を形作つて生活してゆくのは、我々一人一人が、人間として完成する爲だ。一人一人が、もつて生まれた天禀の才を遺憾なく發揮して、人間らしい人間になることだ。

それを難しい言葉で、色々に言つてゐるだけだ。卽ち人格の完成といふことが、我々一切の人間の究極の目標である。自由主義といふのがそれだ。

故に一切の人間の運動は、一人一人の魂に呼びかけてゆく運動である。このことは、宗教家に於て、教育者に於て、文藝家に於て、特に著しい。然し直接間接の差はあつても、一切の人間は、誰かの靈にむかつて、呼びかけてゐるものだ。かうして我々は、自分の靈を磨き、同時に他人の靈を磨きつゝ生活してゐるのだ。

かくして我々は、何等かの痕跡を、この地上に留めて死んでゆきたいと希願してゐる。その昔、ローマのさる大富豪が、ローマの共同墓地の中に、一番大きい墓表を建ててくれと遺言して死んださうだ。その墓石を、二千年後の今日訪れ見る人々は、彼の愚かなる志を笑ふけれども、私はそこに人間の悲痛な叫びを看取す

烙印

る。

我々は誰一人として、この儘死んでゆきたくはないのだ。何かの足跡を殘して死にたいのだ。何かの印象を地上に留めて死にたいのだ。

その一番大きい痕跡は、墓石よりも、空名よりも、ある個人の胸に自分の人格を刻み込んで死んでゆくといふことだ。宗教家が一番深い存在として地上に殘つてゆくのは、大勢の人の胸の中に、烙印のやうに自分の姿を燒きつけて死んでゆくからだ。

この人格的烙印として、最も生々しい、最も深いものは、母が子の胸の中に燒き付けた愛の烙印だ。その烙印が子孫から子孫へと傳はつていつて、そこに人間性の地上に於ける不朽の姿が現れる。

それは母の子を思ふの情操は、利害も、虚榮もない純情な一心

なものであるからだ。

固より母たるの情は民族と人種とに於て差別はない。然し環境と教育とは、人間の性質に深刻な變化を與へる。日本の社會環境は、日本の婦人を驅つて母としての任務に專念せしめ、隨つて母としての情操を洗錬せしめた。故に多くの場合に於て、日本の子供たちは母に對して、燃ゆるがごとき思慕の情をもつてゐるのである。

それは逆に言へば、日本の婦人たちの生活に狹き限界が設けられてゐた反映であるともいへる。

日本の婦人は、内助といふことを、その理想として教へられた。その内助といふことを、日本の男性たちがかなり濫用してゐた。男性はどんなことを外部でしても、妻は内助の德操にしがみついてゐなければならない場合が澤山にあつた。その爲に、不幸な

る婦人たちは、勢ひその子供に對する愛情に最後の避難場を求めてゐた。

勿論、子供に避難し得たことは、日本の女性として感謝しなければならぬ。ある外國に於ては、子供をも女性から奪つてゐるところすらあるではないか。

さうして、ここに日本の母と子との、特有なる生活と情操とが展開せられた。それは日本生活中の最も輝ける一面である。

いま日本が、新しく世界文化の主流中に乘出したについては、日本が世界文化の寶庫に何物を貢獻し得るやといふことを、我我は靜かに考へて見なければならない。

その多くのもののうちに、私は日本女性の貢獻を數へたいと思ふ。我々が過去に於て、積み重ねてきた美と善との一切を、更に淨化して、これを世界文化の殿堂に捧げたい。さうして、東海の一

闡明

瞠若

孤島にかくの如き文明が育まれてゐたといふことを十幾億の全人類に向かつて闡明したい。

私は日本の女性の缺點について盲目ではない。日本の婦人たちが自ら矯正し、進んで獲得しなければならぬものは數々ある。然し同時に、日本の女性は決して失つてはならない多くの美しき清きものをもつてゐる。その輝ける一つは、母としての情操である。清く、正しく、賢く、而して強くして、優しき母としての日本の女性が、これ迄の日本を作つてきた力だ。さうしてまたこれからの日本を新しく創造する力である。

——母——

一五　女子と文學

我が國の女子には和歌に秀でしもの、才學男子をして後へに瞠若たらしめしもの、上古以來屢、見るところなり。萬葉集の中に

(一)天武天皇の妃。
(二)天武天皇の皇子大津皇子の妃。
(三)大伴宿奈麿の女。母は大伴坂上郎女。
巾幗者流
彬々
唱和贈答
文學の淵叢
彩華爛漫

も、額田女王(一)石川郎女(二)、坂上大郎女(三)など巾幗者流の作品、また決して少しとせず。されどその才媛淑女の彬々として輩出せるは、實に平安時代にして、文學は殆ど女流の獨占に歸し、男子はあるかなきかに、その一隅におされぬ。そのかくの如くなりしは、基くところ一にして足らざるべしと雖も、女御、更衣が各その威勢を張りて權力を爭へるも、またその一主因たるべし。卽ち才學ある女子は、擧つてその招に應じて後宮に集れるなり。集りては互に才を競ひ、男子もまたこれと唱和贈答せんことを求めければ、後宮はやがて文學の淵叢、女房は卽ち文界の粹となれり。かくて彩華爛漫たる平安女流文學は生まれ出でたるなり。

平安時代の女流文學者の中にて、最も著れしものを擧ぐれば、和歌には小野小町、和泉式部などあり。散文には紫式部、淸少納言などあり。小野小町は女性美の最もよく發揮せられたる一人と

天成の詩人

して、常に業平と對せしめらる。業平は天成の詩人にして、その心に感ずる儘の歌となれるもの、風の河上を行きて水おのづからに文をなすが如し。たゞそれ感情の走るに任せて口に上せ、敢て刻苦鍊磨をなさず、所謂心餘りて詞足らざるところあり。

亞流

小町もまた業平の亞流にして、たゞ感情の儘に詠出す。その詠の業平に比して、更に濃艶優麗なるもの多かりしは、さすがに女性の作なればなるべし。

小野小町

多情多恨

盡きざる概あり

和泉式部もまた才色雙絶、多情多恨、ものに拘束せられず。怨みては咽せび、笑ひては鳴り、綿々滾々として盡きざる概あるもの實にその性情のほとばしり出でしところなり。その詩才の豐富にして所作の多量なるは、蓋し小町の上に出づ。若しそれ和歌の眞の價値を以てすれば、この式部こそ業平と並べて、平安歌人中の二星といふべけれ。

千載のもと

源氏物語の著者は、人も知る如く紫式部なり。早く夫に後れて寡居せる時に、この大著を成し遂げたるなり。性貞淑にして、節操の譽高く、その德行は千載のもと婦女の龜鑑とするに足るものありしを以て、その詞想もまた放縱浮薄なる當時の人情風俗を描寫しながら、何所となく氣品高く、同情に富み、その筆致もまた逸氣奔放の風なく、順良謹愼にして、長所に誇らざる趣あり。

逸氣奔放

清少納言に至りては、その性情正に紫式部と相反し、機敏にして才情溢れ、屢、人を驚かせり。その著枕草子は、多く彼が遭遇せる事實の追憶、さらずば時々をりをりの見聞感想にして、秩序もな

く、筆に任せて書列ねたるものなり。而してその文を行るや、奔放にして自由、些の溢滞を見ず。偽らず、飾らず、眞率に彼が本來の面目を暴露し來りて、その驕慢なる虚榮心の、隨所にほの見えたるもをかし。しかもその觀察は緻密周到を極め、言々は痛快警拔、寸鐵よく人を殺すが如きものあり。

かくして紫式部と清少納言とは、その相反せる性情と著作とによりて、平安時代の文學を飾れるなり。その他、赤染衛門、伊勢大輔等も、またこの時代にありて名を知られたる才媛なり。

降りて鎌倉時代に入りては、和歌に式子内親王、宮内卿（一）あり。散文に阿佛尼（二）あり。式子内親王は後白河天皇の皇女にして、當時和歌を以て著れし雅家（三）、定家（四）、通具（五）、家隆（六）等も及ばざるところありきといふ。されどこの時代を代表せる女流は阿佛尼なり。阿佛尼は藤原爲家の室。その著十六夜日記の文、詞短くして意長く、平易に

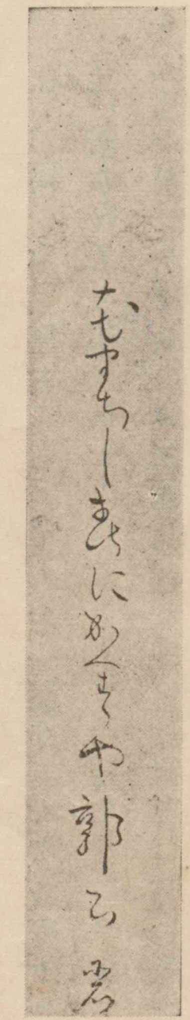
溢滞

警拔

（一）後鳥羽天皇の宮女。右京大夫源師光の女。元暦年中の人。
（二）平度繁の女。弘安六年（一九四三年）歿。
（三）從三位。中納言藤原雅孝の男。
（四）正二位權中納言俊成の子。京極中納言と稱する仁治二年（一九〇一年）歿、年八十。
（五）正二位大納言。土御門内大臣源通親の男。
（六）從二位。中納言藤原光隆の男。

して高雅なり。その地勢形勝を叙して簡明なる間に所々旅情をのべ、怨恨の念を洩らし、子を思ふ親の心を寫せるうちに、一種の趣味を味はふことを得べし。

これより室町時代以後に至りては、女子はいたく卑下せられ、武人ひとり天下に跋扈する情態となれり。されば、また平安時代の如き才媛の輩出するを見ること能はず。たゞ戦亂の世にありて、小野お通（一）の博學にして文をよくし、十二段草子を作れりといへるは珍し。徳川氏天下を一統して文教を奬勵するに至りても、女流文學者にして遠く中古の盛に比すべきものを見ず。中につきて加賀の千代の俳句に於ける、荒木田麗女（二）の歴史に於ける、や



麗女筆蹟

卑下す

（一）傳記未詳。家康に仕へ、秀忠の女千姫が秀頼に嫁した時隨つて大阪城に入り、淀君の信任を得た。

花まちし春にかへすや郭公　麗

（二）伊勢の神官荒木田武遇の養女。慶徳三郎大夫の妻。文化三年（二四六六年）歿、年七十五。

や見るべきあるのみなり。千代女の「ほとゝぎすほとゝぎすとてあけにけり」の句は、人のよく知るところなり。荒木田麗女の月の行方、池の藻屑は、(一)三鏡の後を繼ぎ、慶長の頃に至るまでの歴史を述ぶ。我が國女流の歴史家として、人の推奬するところなり。

我が國の女流文學は、かくの如くにして、明治聖代の文化に入ることを得たり。王政の維新と共に、女子の教育日に月に隆盛に赴き、また昔日の比に非ず。將來社會文化の進むにつれて、男子は研究發明に心を潛め、生存競爭に力を盡くすべし。この時に當りて、女子たるものまた我が固有の文學を研鑽し、以て文學史上に光彩を添ふる覺悟なかるべからず。

——藤岡作太郎「國文學史講話」に據る——

(一)水鏡、大鏡、增鏡。

研鑽

一六 ここまで來た

野口米次郎(一)

さあここまで來た。

これが道のどんづまりだ。この先には道がない。

私ひとりで行くより外はない。

私をここまで乘せて來てくれた馬子さん、よく馬をいたはつて引返して下さい。

強力さんともここでお別しませう。

この先私と一緒に來てくれるには及ばない。

君の深切を無にするやうだが、これからの道は私の力一つで求めねばならない。

馬子さんも、強力さんも、よく苦痛を私と一緒に嘗めて下すつた。

(一)詩人。慶應大學教授。明治八年愛知縣に生まれた。野口米次郎詩論、表象抒情詩、野口米次郎ブツクレツト二十餘冊等の著がある。

君等の深切は決して忘れないでありませう。

だが、この先道のない谷を越え、もう一つ山へ上るのが私の力だ。

どうか私の成功を祈つて下さい。それが私の頼みだ。

今この山上に立つて、君等と上つた道を見おろすと、

ずつとの下は綿のやうな雲で包まれ、

その上をしぶきのやうな灰色の霧が右から左へと走つてゐる。

この山にしても、心配なしでは上れない高い山だ。

そして、更に私がひとりで上らうとする山の方を見ると、

その山の前に深い大きな谷が横たはり、それを越える道がない……

だが、そこが私の力だめしだ。私は行手を恐れるものでは

ない。

強力さんも、馬子さんも、私を殘してずんずん山をおりて下さい。

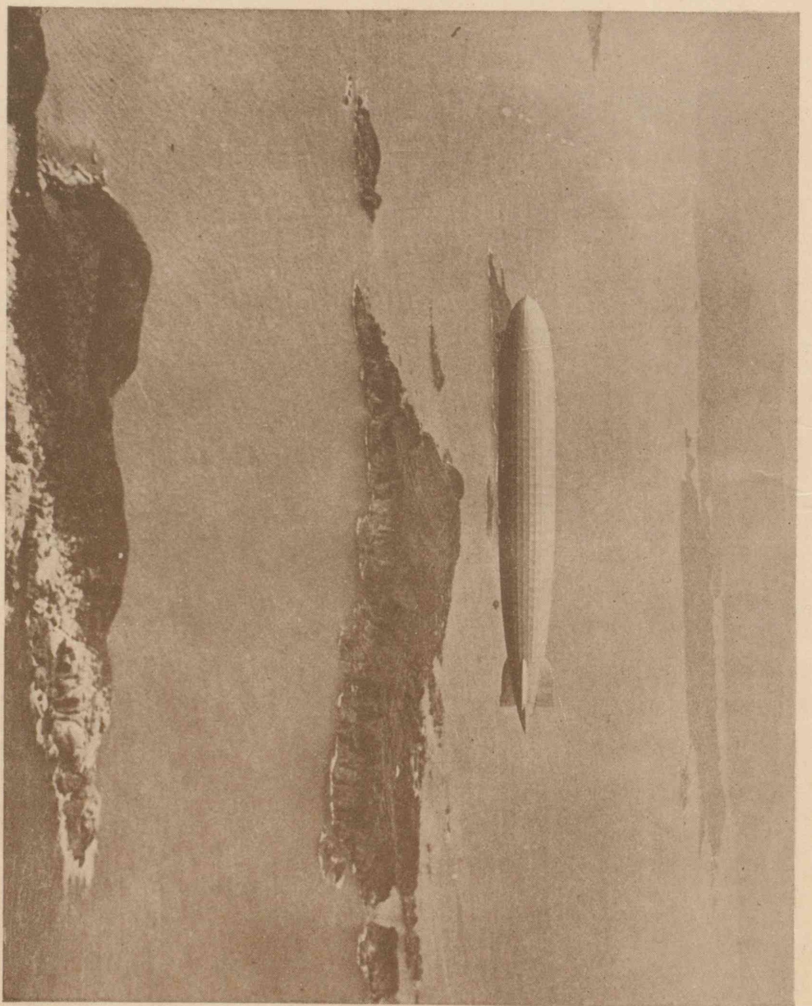
私が耳をそばだてると、ずつとの下の谷底から水が私を呼んでゐる。

あゝ、御覧なさい、暗い谷から高い山へかけて五色の虹が立つてゐる。

私の心のなかで勇氣がりんりんと鳴つてゐる。

早く馬の頭を廻して馬子さん、さつさと下山して下さい。

強力さんもさやうなら。またどこかでお目にかゝりませう。



金華山上のツェッペリン伯號

東京朝日新聞社撮影

一七　Z伯號に同乘して歐亞の空を渡る

北野吉內(一)

(二)八月十五日(木曜日)快晴

發動機が廻り出したと思ふ刹那に私を乘せたZ伯號は少しの動搖もなく、ふんわりと地上を離れてごく輕く蹴られた風船玉のやうに緩やかに百二十五メートルの高さ迄直線的に舞揚つた。(三)ゴンドラの窓から半身出して、見送りの人たちと大きな聲で別を惜しんでゐた私と、友人たちとの距離があつといふ間に遠くなる。夢中になつて日の丸の小旗を振つたけれど地上の人たちの顔は見えない、たゞみんなが喊聲――(四)グラーフの優雅な離陸を見て一層亢奮した(五)ボン・ヴォヤーヂの叫が微かに船窓のあたり迄傳つてくる、一氣に百二十五メートルの高さに浮揚し

(一) 大阪朝日新聞社會部長。明治二十五年山形縣に生まれた。ツェッペリン伯號世界一週の際、ドイツのフリードリヒス・ハーフエンより霞ケ浦まで同乘した。本文はその記事の抜粋である。

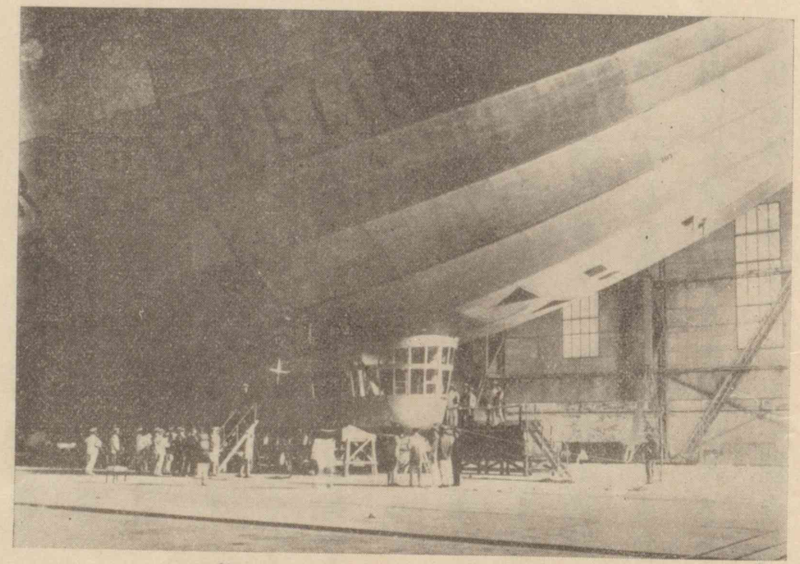
(二) 昭和四年。

(三) Gondola.

(四) Graf Zeppelin. の略

(五) Bon voyage.

(一) Sallon.
(二) Captain von Schiller.



Z伯號の一部

た、LZ百二十七號――即ちグラーフ・ツェッペリンは直ちに發動機の爆音勇しく前進を開始した、時に午前四時三十五分。プリードリヒス・ハーフェンの空に黎明がきて大格納庫の輪廓が明るく見え出してきた。いい夜明けだ。『次のステーションは東京です。』サロン(一)に集つて觀望に忙しい乘客の中に交つて、飛行船の第三船長で事務長格のキャプテン・フォン・シラー(二)が大

聲でかうアナウンス(一)する、冗談でない、全くそのとほりだ。ツェッペリンの世界一周霞ケ浦迄一萬一千キロ、第一次無着陸大飛行がそのスタートを切つたのだといふことを、はつきり意識して見るが、然し命がけの大冒險に乘出す時感ずるやうな悲壯とか、ヒロイック(二)とかいふ氣持が少しも起つてこない。五日間の大飛行は壯快の極であるが、私はなんの不安にも襲はれない。ツェッペリンが霞ケ浦の空に安着することは、横濱を出た巨船が間違ひなくサンフランシスコの港に着くほど確である。たとへシベリアの大平原の上で突風を喰つても、また北極圏の空を縦斷しても、この大飛行船は大丈夫だと、絶對的に近いその安全性を信頼するので、決して決死の旅に上るのだとも思はない。私は幾分物見遊山の氣分でフリードリヒス・ハーフェンに訣別する。

私は第一號キャビンに納まる。ゴンドラの前半は操縦室、無電

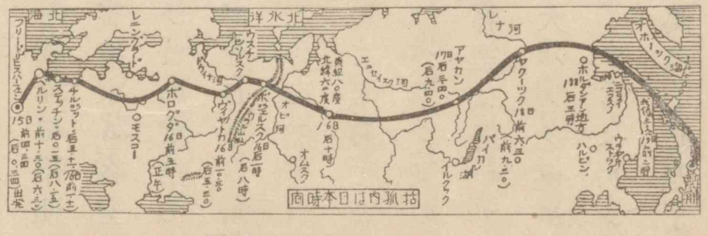
(一) Announce.
(二) Heroic.
絶對的安全性

局、臺所それに食堂、後半は客室になつてゐるが、客室は狹い廊下を挾んで兩側に五室づつ、一室に二人詰だから旅客二十人は收容出來る。客室の後に男女別々の洗面所、そこでは湯と水が栓をひねれば出てくるのはロンドンのホテルよりはましだ。その次がW・Cといふ配置、客室には全部大きな窓があり、その外に素晴しい自然が百色眼鏡的速さで次ぎ次ぎに展開してゆく。坐つてゐても寢てゐても窓を覗かぬわけにはゆかない。グラーフ・ツェッペリン號のチャーム(一)は乘客が食堂で御馳走を食べてゐても、客室に退いて寢轉んでゐても、廣濶な窓を通して變轉極りない大パノラマが躍ることだ。

ツェッペリン船上の第一日はロシヤ國境に暮れた。銀色の大飛鳥は七時四十五分デュナベルグを過ぎ勞農ロシヤの大空に浮かんだ。同地迄の航行距離千五百六十六キロ、一同元氣で一人も

(一) Charm.

船暈を感ぜず、最初の晩餐にはたゞ一人の婦人乘客ヘイ女史(一)以下殘らず勢揃ひす、食堂の一卓には日獨國旗が飾つてある。三日月が右舷の空に現れた。夜食後のサロンは蓄音機のジャズ樂と漫談に賑はひ元氣なリーズ(二)君始め若者同士卓を圍んで夜更ける迄リキュール(三)のグラスを捨てない。靜かな餘りに平靜な天空の旅だ、二千尺の空を快速力で飛んでゐるのに船體の動搖は極めて少く、三四萬トンの客船あたりに乘つてゐるよりはずつと樂だ、たゞ單調な發動機の響がどうしても耳につくのが氣になる。私は飛行船に馴れないのだらう、頭が妙に澄んで何をする氣力もないたゞぶらぶら寢て食つてゐた



Z伯號經由圖

(一) Lady Drummond Hay.
(二) William B. Leeds.
(三) Liquil.

いほどだ、つまり輕いエヤ・シックネスなのだ。

夜更けて日本の本社から第一電が空中の私に屆いた、愉快な驚であつた。

八月十六日(金曜日)晴(船上第二日)

極く安らかな眠り、とても汽車のベットなんかでは味はへぬほど氣持よい熟睡から醒めた。窓越しに美しい綠野が走つてゐるツェッペリンの上に寢て、空高く飛んでゐることを私は心地よいベットの中で一寸忘れた。

午後三時一千二百五十メートルの高度でカマー河を渡りウラルの山嶮越えとなつた。三時四十五分キゼロウスキーと呼ぶ小都會の上で、ロシヤ人乘客カークリン(一)君が出した五枚の繪葉書を空中郵便として落した。こんな山間の町には史上始めてのエヤ・メールであること勿論だ。ウラルの山地には、大森林がどこ

(一) Karklin.

迄も續いてロシヤの富を語つてゐる。その無限に續く森林の一部がちやうど山火事で燃え上がつてゐた。白い煙が晴れた空高く物凄く立昇り、船内の活動技師と寫眞技師が豫期しない撮影材料が湧いて來たので、はしやぎ廻る。ところが山火事が乾燥し切つた森から森へ擴がつたと見え、見おろす下界はいつの間にか一面に白煙に包まれて全く展望がつかない。山火事もこんなに迄大規模なものがあるものかとウラル山地の空で驚かされた。

五時三十分大體北緯五十九度東經五十五度の邊に當るウエルコスール附近で千三百メートルの高度でウラルを突破、グラーフ・ツェッペリンがその雄姿を初めて北アジアの空に現した。やがて水平線上に昇つたアジアの月は、初めてツェッペリンの巨體に光を投げたが、一同が晩餐の席につくころ空が曇つて折角の

月が隠れた。

八月十七日(土曜日)曇

午前三時迄サロンで話がはずみ夜明けを忘れた。午前二時三十分北シベリアの水平線上が一面に紅くなつて、早くも黎明が來た、水平線上に浮動する雲の美しさ。北極に近い夜明けの美觀に打たれてリーズ君と私たちはサロンを去りかねたのだ。人跡未到のシベリアの曠野は凸凹限りなく、見わたす限り疎な灌木と無數の沼地の連續だつた。この淋しい大曠野の上に初めて新航路を作りながら、進んで行くツェッペリンは靜かな黎明の餘光を一面に浴びた。

午前八時(ロシヤ時間)迄の航程五千百四十七キロ、霞ケ浦迄の全コースの半分を翔破したわけになる。

北極圏に近いので寒暖計を見ると攝氏五度半の寒さ(午前十

時)ヘイ女史始め皆が皮外套で身を固めてゐるのも尤もだ。エニセイの支流は眼下の平野と山地の間を、絲のやうにうねり雲間から洩れる朝の光が、この自然畫を美化する。まるで地圖を見るやうだ。見おろすと小さな川の水が半分ばかり凍結し、そこを白熊が數匹歩き廻つてゐる。さすがに北シベリアにふさはしい。

午後四時暗澹たる夕立雲がどこからともなく現れて、天界俄に薄暗くなつた。恐ろしい夕立に見舞はれ、土産話を作るのでないかと案ぜられたが、飛行船は夕立雲の下を平氣で走り抜けて、からりと晴れた彼方の空の方へ避難した。然しかうした早業はグラーフ・ツエッペリンの快速力、その堅實な性能をもつてして初めて出來得ることとなのだ。六時ごろ探檢家の(一)ウイルキンス大尉が、大曠野の中にテントが見えるといふ。なるほど極地に遠くない人跡稀な曠野に、小さな二つのテントが見え、數人の人々が旗

(一) Captain Wilkins. (Sir Hubert Wilkins)

を振つて飛行船に合圖してゐる。ウイルキンス大尉はいつも窓側に立つて、注意深く觀望を怠らなかつた。

八月十八日(日曜日)曇

ヤクーツクからオホツク海迄八百キロ、ツエッペリンは思はざる大難關を突破したが、それは全く目ざましい。時に乘客の膽を寒からせたこの度の飛行中の最大冒險だつた。オホツク海への道を遮る連山脈の嶮(一)(クレベット・トデニグジユール)もの凄く天を摩する重疊たる峰はどこ迄も限りなく續いてゐる。飛行船は千メートルから千五百メートル更に千七百六十メートル迄高度を高め

ゴンドラ内の一部

(一) Khrebet djugjur.

て午後二時五十分この山嶮突破に取りかゝつた。地圖によると山脈の最高所は三千三百フィートになつてゐるが、實地探檢でそれが六千フィート近いことがわかり、地圖の誤謬を訂正し得ることになつた。エッケナー[一]、レーマン[二]の幹部は悉く操縦室にゐつて乘組員を指揮命令する。山脈のうねりが甚しくて、飛行船は時に幾十尺かの低空に落ちるかと思ふとまた上昇する。その突起した嶮しい峰の頂に、打つつかるのではないかと膽を冷させるが、グラーフ・ツェッペリンの驚くべき性能は、こんな難所難關にきてよく發揮される。我等は三時廿四分、山嶮の頂上を越して三時三十七分には、アイアン港附近の上で無事オホツク海に出た。遠く白雲の去來する海洋を船首から望んだ時のエッケナー老司令の喜、マイバッハ[三]發動機とZ伯號との優秀を再び立證し得た喜悅は、かのコロンブスが大陸を望見した時の喜にも比すべ

(一) Eckener.
(二) Lehmann.
(三) Maybach.

きものがあつたかもしれない。難關突破の成功の祝辭を受けたエッケナー老司令は、たゞ自分の乘組員の優れた腕前、經驗と勇氣を誇つたに過ぎなかつた。全くそのとほりだ、この飛行船に乘つてゐる三十九名の人々はいづれも粒選りな適任者だ。

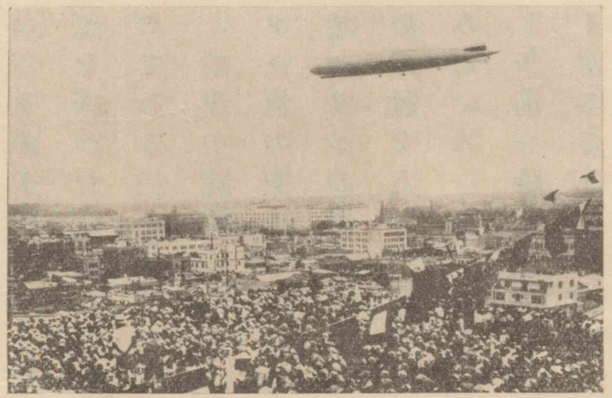
斷崖の屹立つところに北海の白雲がしきりに去來する。オホツク海の空はすばらしく綺麗に晴れて、靜かな波に飛びゆくツェッペリンの影が映る。高度三百五十メートル、何といふ氣持のよい飛行であらう。海上は殊に船體の搖らぎも少く誠に壯快な極みだ。

午前一時北海道にだんだん近づくころ、たうとう大雨の中をくぐることとなつた。

八月十九日(月曜日)晴

海上も空も雲と霧に一面蔽はれてゐた。しばらくすると「見え

ましたよ！」徹夜の藤吉少佐が大聲で怒鳴つて操縦室からサロンへ入つて來た。午前六時二十五分遙かに北海道の山が見えて來たのだといふ。今曉の雨霧に祟られ飛行船は比較的樂なコースを選んで南下してゐるうちに、小樽沖なんかは判らず壽都(シロルン)灣附近迄來てしまつた。ここから内浦灣へ、北海道の首を横斷して太平洋へ出ることになつた。ちやうど深い霧がずうと晴れて、大きな虹がツエッペリンを歡迎するやうに空に大きく現れた。


東京街上のZ伯號

美しい北海道の山、白波の岸に躍る美しい海岸線、美しい日本が、四年ぶりの故國の姿が急に眼下に

展開した。七時四十九分、飛行船は三十分かゝらずに北海道を横斷して太平洋に出た。やがて駒ケ嶽が見えた。午前九時尻屋岬の北二十マイルの空に來て、ここから太平洋岸を水戸迄かすめる、東京が近い、霞ケ浦も近い、私の心は躍る、私は慌しく部屋に退いて荷物の整理に當る。

それは本當に不思議な夢のやうだ――木曜の朝は綠草美しい南獨フリードリヒス・ハーフェン、月曜の午後は霞ケ浦、出發の日贈られた花束は私の船室にまだ香りを放つて生々してゐる。

一萬九百九キロを一氣に翔破したツ伯號は、疲れた大飛鳥のやうに五日ぶりに格納庫に横たはつた。新しい歴史のページが、その驚くべき大飛行によつてまた書かれた。それは勿論マイバッハ發動機の大勝利であり、故ツエッペリン伯の先見の明と、硬式大飛行船の長距離航空に對する實用性を立證せるものである。同

時に航空界に於けるドイツの優越を物語ることは勿論である。グラーフ・ツェッペリンが翔破した航路は、近き將來大飛行船による世界觀光が日常事になつた時、その定期航路の一部になるものであらう。グラーフ・ツェッペリンの如き大飛行船の旅は、驚くほど快的で、その點では遙かに汽車汽船の旅を凌ぐものだ。すばらしい速力も偉大な船體を搖がさず、天候が險惡でない限り船上の生活は愉快この上もない。ツェッペリンは空中に浮かぶ一大ホテルだ。フリードリヒス・ハーフェンから霞ヶ浦へ。この空の旅は何の危險もともなはぬ平安な航路であつた。それは決して幸運とか僥倖とかいふのでなく、ツェッペリンの場合は殆どいつも可能なのだ。

——東京朝日新聞に據る——

(一)國學者。國學院大學教授。御歌所寄人。明治元年東京に生まれた。古今集評譯、枕草子評譯等の著がある。

諷刺

おとがひ(頤)を解く

突梯

應接に遑あらず

寸にして珍

一八　川柳點

金子元臣(一)

初代川柳

川柳點は實に剃刀の如きか。觸るゝもの皆斷れ、近づくもの皆傷つく。語句簡勁にして直ちに人の肺腑に入り、諷刺骨に徹り、滑稽おとがひを解き、或は痛快に、或は輕妙に、或は突梯に、或は奇怪に、千變萬化、人をして應接に遑あらざらしむ。時に輕薄鄙俚なる調なきにもあらねど、要するに、寸にして珍なるものなり。いで左にその二三を擧げて、いひ試みん。

あがるなといはぬばかりの帳を出し

無筆者年賀に來て、御慶帳の記名に困り、「さらば來ぬ分にして下され。」といひしこと、昔の笑話に見えたり。今は帳の代りに名刺受を玄關に出す。これも、あがるなといはぬばかりなり。

(一)宋の文章家。名は軾。(西暦一〇三六年―一一〇一年)

(二)「いそがずばぬれざらましを旅人の、あとより晴るゝ野路のむらさめ。」

座頭

竹の子は盗まれてから番がつき

よくあることなり。後の祭にもあれ、何にもあれ、番を附くるは附けざるに勝れり。聞きやうによりては、諷刺ともなり、訓誡ともなるなり。

おさへれば薄はなせばきりぎりす

形容の妙を曲盡せり。蘇東坡(一)が「餓蚊取渇虎。」と書きしをいみじき手がらのやうに驚ける人、若しこの句を見ば、何とかいはん。

本降になつて出てゆく雨やどり

道灌の「いそがずばぬれざらましを。」(二)の歌と一對の巧語。急ぎてもわろし。急がでもわろし。とにかく考へものなり。

提燈が消えて座頭に手を引かれ

その矛盾がをかしきなり。塙検校が「さてさて目あきは不自由な。」といひしに似たり。

片假名に四角な文字は手を引かれ

漢文に捨假名、反點の左右にうるさく附きまとへるさま、譬へ得て妙。昔のヲコト點ならんには、「四角な文字に灸をする。」ともいはばいふべし。

手紙には狸臺には鯉を載せ

手紙を見て肝を潰し、臺を見て胸撫でおろすらんをかしさよ。近來は中等教育を終へたるものの文章にも、狐を馬に乘せたる類のこと多し。あながちにこの狸をのみ笑ひ難くや。

名物を食ふが無筆の旅日記

腹のふくるゝ日記かな。食ふより外に能なき人間を罵倒し得て痛快。

泣く泣くもよい方を取る形見わけ

人情の弱點を穿ち過ぎて、餘りに酷なる心地す。かの赤穗の城

(一)本名大野九郎兵衞。

尋常茶飯の出來事。

(二)信濃の戸隱神社。手力雄神を祀る。

口吻を弄す

附會

(三)四卷。藤原清輔の著した歌學書。

渡の際、お金配分に高割を唱へし小野九太夫(一)は、その露骨なるものか。

かくの如く、川柳點は尋常茶飯の出來事をとらへて、よく滑稽化するのみならず、また最も眞面目なるべき故事、傳説、史實等を題目として、その縱橫自在なる口吻を弄せり。

戸隱(二)も神樂のあひだひげをぬき

岩戸の細目に開くまでは、用のなき戸隱明神なるを思ふべし。毛拔にひげぬくひま人の所作を、神代に附會したる、働あり。

御紀行拜見に能因は當惑し

なまじひに名歌を詠みて、苦勞をまうけたるは能因なり。天日に焦して顏だけは黑めたれど、紀行までは手が屆かずやありけん、ものにそのさたなし。作者のつけ目はここなり。但し袋草紙(三)に、「一度に於ては實か。八十島の記を書けり。」とあり。いつも室內旅行

(一)平清盛の父。仁平三年(一八一三年)歿。年五十八。

(二)猪隼太。早太とも書く。源賴政の臣。

(三)源平盛衰記のこと。

(剽輕)

(四)曾我五郎のこと。

駄馬

家にてはあらざりけらし。

忠盛(一)の高名の場を犬がなめ

抱きとめたるは油坊主なるを思ふべし。わざと聯想の一階を飛越して、高名の場を嘗めたりといへる滑稽突梯、誠に及び易からず。

その暗さ、隼太(二)櫻に衝きあたり

盛衰記(三)の、賴政鵺を射る條に、「黑雲とは見たれども、天は誠に暗し。いづくを射るべしと、矢所定かならず。」とあり。乃ち郎等隼太が左近の櫻に鼻衝きあてて、まごまごする一場の喜劇を案出し來れるなり。作者はいかなるへうきんものぞ。

時致(四)は鞭をかじつて息をつぎ

兄祐成が急を救はんとて、途に百姓の駄馬を奪ひて大磯に驅けつくるは、曾我の物語中、出色の快談なり。これを圖にして大根

の鞭を添へたるは、畫工の氣轉なり。せきにせいたる息やすめに、その大根を嚙らせたるは、この作者の氣轉なり。

佐野(一)の馬戸塚(二)の坂で二度ころび

戸塚の坂は鎌倉入の一難所。元來乘力なき源左が瘦馬、さぞや越えなづみしならん。さるを、二度まで轉びたりと誇張したるに、大いなる可笑味を生ず。

芭蕉は飛びこみ道風(三)は飛びあがり

湊合の妙を見る。主題の蛙をいはで、突然にしたてたるところに、一種の面白味あるなり。

釣れますかなどと文王(四)そばに寄り

さすがの聖人文王と、奇傑太公望(五)との邂逅も、話の口火を切るには、極めて平凡ならざるを得ず。たゞ「などと」の語、胸に一物ある趣を狀し來りて、幾多の波瀾あるを覺ゆ。

氣轉

(一)源左衞門常世。謠曲鉢の木に出てゐる。

(二)神奈川縣鎌倉郡。

越えなづむ

(三)小野氏。平安時代の書家。三蹟の一。

湊合の妙

(四)支那周の武王の父。

(五)呂尙といふ。文王や、武王を輔けて天下を一統させた人。

邂逅

自修文

川柳に現れた女性

山内素行(一)

川柳(せんりう)は最も通俗な文學であつて、俳句と形を同じうする滑稽的短詩である。俳句にも滑稽諧謔(かいぎやく)な作がないではない。

寒くとも火になあたりそ雪佛　宗鑑(二)
風寒し破障子のかみな月　同
鴨の足は流れもあへぬ紅葉かな　宗因
猿ひきは猿の小袖をきぬたかな　芭蕉
とんぼうの顏はおほかた目玉かな　知足(三)

これ等の俳句は、一見しては川柳と何等の差違がないやうな觀がある。然し、俳句には春夏秋冬の「季」といふことがあるが、川柳にはかういふ制限は更にない。かやうに俳句には「季」といふものを入れることにきめてあるから、その作は自然に多く景物を題目とするが、川柳はおほかた人事を主題とするの

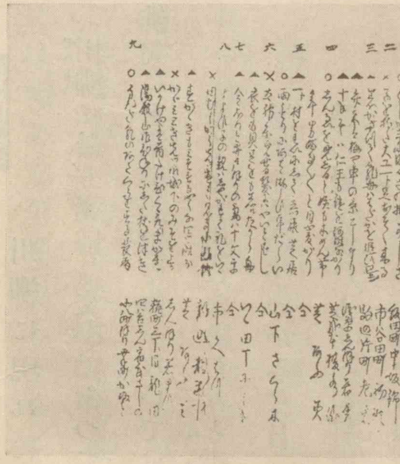
(一)國文學者。明治大學教授。明治八年東京に生まれた。日本短歌史、日本文學辭典等の著がある。

(二)山崎氏。將軍義尙の臣であつたが、後連歌師となり、天文二十一年(二二一二年)八十九歲で歿した。

(三)下郷氏。尾張鳴海の人。芭蕉の門人。寶永元年(二三六四年)六十五歲で歿した。

である。

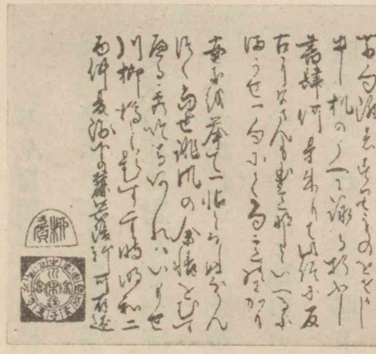
川柳はもと前句附といつて、七七の句、即ち前句を與へてこれに五七五の句を附ける一種の文學的競技から起つたもので、後には七七の句は、五七五の句を作る題もしくはその方針を示すに過ぎないものとなり、終には獨立して五七五の句のみを作るやうになつて、ここに川柳といふものを生じたのである。川柳といふのは、寶暦(一)より寛政(二)に亘つて前句附の作者の泰斗と仰がれた柄井正通(三)の號であるが、その評點を川柳點といひ、これが略せられて川柳といふ作句の名となつたのである。この柄井川柳は寶暦七年の頃から「萬句合」といつて、年々前句



萬句合

(一)桃園天皇の御代。(二四一一年—二四二三年)
(二)光格天皇の御代。(二四四九年—二四六〇年)
(三)江戸の人。寛政二年(二四五〇年)七十二歳で歿した。

を定めて募集した投吟の中の勝句を印刷して公にして來たが、明和四年(一)に至つて、更にその中から獨立して意味をなすものを拔萃した小册子を發行するに至つた。これが即ち所謂俳風柳多留である。



柳樽初篇序文

川柳の特色は着想の奇拔なのと、描寫の極めて露骨な點にある。各種の階級の人物の弱點を摘發し、嗤笑し、諷刺するのを特色としてゐる。然し、教訓的な作もあり、優雅な作にも乏しくない。各種の人物の中で飜弄の焦點となつた女性は下女であるが、これは下女の人格などを餘り尊重しなかつた當時にあつては、已むを得ないことであらう。

下女に次いで多く材料にせられたのが嫁である。いふまでもなく嫁とは新婦のことである。

(一)二四二七年。
拔萃　特に優れたものをぬきだすこと。
嗤笑　あざけりわらふ。
諷刺　あてこすること。それとなくそしること。
飜弄　おもしろ半分に手だまにとること。

嫁

花嫁は口をつぼみにして笑ひ

みんな顔かくすが嫁のおほ笑

笑ふたび嫁手の甲を口にあて

花嫁の花に對してつぼみといつたところに面白味があり、また花嫁が笑ふにも恥づかしがるさまがよく見えてゐる。

やうやうと袖口を出る嫁の脈

脈をとられるのを恥ぢらふ風情である。

連れて來た下女ばか嫁はしかるなり

「ばか」は「ばかり」の意である。

親風を柳にうける嫁の孝

孝に身のやつれ花嫁の美しさ

母親

薄着へ云々　うすいに對してあついといつたもの。

うたゝねの薄着へ母のあつい恩

物差で晝寝の蠅を逐つてやり

針仕事をしてゐる母親の樣子が見えるやうである。

よく寢れば寢るとてのぞく枕蚊帳

うたゝねもいつか着てゐる母の慈悲

井戸端へ子の行く夢に母は汗

たゝかれず赤子の顏の蚊の憎さ

添乳してつい洗濯が夢になり

寢てゐても團扇の動く親心

我が子をあふぐ團扇がうつゝに動いてゐるのである。

ゆきたけのゐはぬを母はうれしがり

我が子の成長を喜ぶ母親の情である。

二三年縫ひこんでおく母の慾

内儀　おかみさん。

我が子の着物を仕立てる母親の心である。

　お内儀が立つてはさみの落ちる音

針仕事のはさみである。

内　儀

呼ばれても二針三針縫つて立ち

いゝ日和内儀戸板をはづさせる

戸板は張物に用ひる爲である。

粉のふいた子を抱いて出る夕涼

あせもの粉藥である。

子　供

飯事の所帯くづしがあまえて來

縫紋を乳を呑み呑みむしるなり

母のゑくぼつゝついて乳を呑み

頑是ない　小兒などのまだ是非善惡のわきまへないこと。

請狀　身もと引請證書。

蟲干に小袖着たがる頑是なさ

買ひにやる子に絹絲を五六寸

買つて來る絹絲の見本である。

乳　母

目見え乳母兩肌ぬいで兩手つき

乳をあらはして御目見えをするのである。

乳母の名は請狀の時見たばかり

いつも、ばあやばあやで濟んでゆくのである。

さがる乳母晝寢の顏へ暇乞

幼君の晝寢の顏である。

早少女

さをとめは子を寢かすにも田植歌

白つぽく田植に嫁の目立つなり

(一)明治維新まで行はれた五つの節句。正月七日(人日)、三月三日(上巳)、五月五日(端午)、七月七日(七夕)、九月九日(重陽)の稱。

(二)支那の風俗によつた公事。泉水の上流から盃を流し、己の前に流下するまでに詩を作り、盃をとつて酒をのむ。後世はただ作詩と賜宴の式だけが殘つた。

(三)第百九代明正天皇。

雛祭は五節供(一)の一として、廣く民間に行はれた婦女子の遊樂であるから、川柳にもこれを謳つたものが頗る多い。雛祭の起源は明らかでない。三月三日は古來禁廷で曲水宴(二)を行はせられた日である。また巳の日の禊といつて、人々の罪や穢を川に流し淨める儀式の行はれた日である。この二つはいづれも漢土から傳來したもので、もとは三月の初の巳の日即ち上巳の日に行はれたものであるから、普通三月三日を上巳といふのである。雛遊といふことは源氏物語などの物語や古記錄にも出てゐるが、これは臨時に行つたもので、單に人形遊であつたに過ぎない。三月三日に雛遊を行ふ習俗は、足利時代からあつたやうである。然し、これが廣く民間に行はれるやうになつたのは、德川時代である。この雛祭は紙人形を造り、これで身體を撫でて、これに罪や穢を移して川に流す、所謂巳の日の祓と、古來の所謂雛遊とが混合して始つた行事であるといふ古からの說は最も有力なのであるが、今日行はれてゐるやうな雛祭は、後水尾天皇の皇女興子(三)内親王が、御年六歲で皇位に登らせ

禁裡　宮中のこと。

(一)東京市日本橋區十軒店町。雛人形店の軒をならべてゐる所。

家計不如意　一家のくらしのうまくいかぬこと。

られた御卽位式に因んで、御生母の東福門院の行はせられた雛祭を、民間にも移し行ふやうになつたものだといふのは最新の說である。雛人形の中で最も普通なのは所謂內裏雛であつて、卽位式に模したものであるから、俳句に於ても、川柳に於ても、禁廷を背景としたものが多數を占めてゐる。

手をつけぬものさと母は禁裡守護

は子供が雛に手を觸れたがるのを母が制する意である。

十軒へ王位を望む娘來る

は十軒店(一)の雛店へ大望を抱いて娘がくる意である。

やかましく階下に並ぶ女客

雛段の前口まめな客五六人

豆煎を食べながらしやべる客である

禁裡樣離宮へしまふ御不勝手

「離宮」は質屋をきかした語「不勝手」は家計不如意の意である。

質屋から御裳濯川の流れ雛

逆鱗のやうな內裏は賣れ殘り

怒つたやうな顏の內裏雛は賣れ殘る意。「逆鱗」は天子の怒の意。

內裏雛女の方が御內福

婦人の調度ばかりが並んでゐるのを言つたのである。

雛店で花見に行かぬはずにする

ことしの花見をやめて、その代りに思ひきつて良い雛を買ふといふ婦人の情を謳つたのである。

內裏造營押入れを明渡し

雛を飾る爲押入れを明けわたすのである。

女の子三日掛字をしまはせる

雛祭の爲に三日間、床の間を占領せられる意である。

雛の膳客は左やにぎり箸

左箸や握箸の幼い客である。

四日には夫婦別ある內裏雛

別々にしまはれる意である。

紙雛に相撲とらせる男の兒

紙雛を紙相撲に應用した意で、いかにもありさうなことで、穿ち得て妙を極めた句である。

以上掲げ來つた女性に關する川柳の中には、人を噴飯させるにとゞまる座興的の作もまじつてゐるが、これ等によつて川柳といふ短詩の一斑を知得ると同時に、古今に通じた女性の面目をも併せて窺ひ得ると信ずる。

一九　十六夜日記　　阿佛尼(一)

粟田口(二)といふ所より車は返しつ。程なく逢坂の關こゆる程に

さだめなき命は知らぬ旅なれど

穿ち得て妙を極む　不思議なまでに十分言ひつくしてある。

座興　一時のたはむれ。ちよつとしたざれごと。

(一)前但馬守平度繁の女。藤原爲家の妻。才學があつて歌道に精通し、十六夜日記、庭の訓等の著がある。

(二)山城國愛宕郡。

十六夜日記　岩田正己筆

またあふ坂とたのめてぞゆく

野路(一)といふ所は、こし方ゆく先人も見えず。日は暮れかゝりて、いともの悲しと思ふに、時雨さへうちそゝぐ。

うちしぐれふる里おもふ袖ぬれて
　ゆくさき遠き野路のしの原

こよひは鏡(二)といふ所に着くべしと定めつれど、暮れはてて行きつかず、守山(三)にとゞまりぬ。ここにも時雨なほ慕ひ來にけり。

いとどなほ袖ぬらせとや宿りけん
　まなく時雨のもる山にしも

けふは十六日の夜なりけり。いと苦しくて臥しぬ。未だ月の光は微かに殘りたる曙に、守山を出でて行く。やす川(四)渡るほど、先立ちて行く旅人の駒の足の音ばかりさやかにて、霧いと深し。

旅人は皆もろともに朝立ちて

(一)近江國栗太郡の宿驛。
(二)同國野洲郡の宿驛。
(三)野洲郡。
(四)野洲郡。

こまうちわたす野洲の川霧

十七日の夜は、小野(一)のしゆくといふ所にとゞまる。月出でて、山の峰に立ちつゞきたる松の木の間、けぢめ見えていとおもしろし。ここは夜深き霧のまよひにたどり出でつ。さめがゐ(二)といふ水、夏ならばうち過ぎましやと思ふに、かちびとはなほ立寄りて汲むめり。

むすぶ手に濁る心をすゝぎなば
うき世の夢やさめが井の水

とぞおぼゆる。

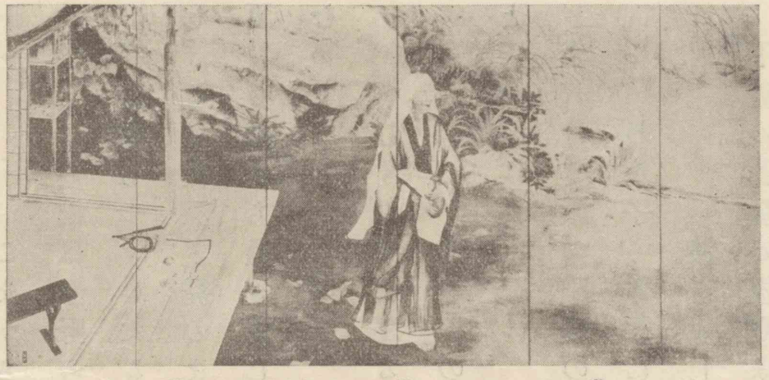
十八日、美濃の國關(三)の藤川渡るほどに、まづ思ひつゞけける、

わが子ども君に仕へん爲ならで
渡らましやは關のふぢ川

不破(四)の關屋の板庇は、今もかはらざりけり。

(一)同國坂田郡。
けぢめ見えておもしろし
(二)坂田郡。名高い清泉があるので、この里の名とした。
(三)岐阜縣不破郡。古今集に「みのの國せきの藤川たえずして、君に仕へんよろづ代までに。」
(四)同郡。天武天皇の時に始る。鈴鹿、逢坂を合はせて三關と稱する。

心より外に
(一)同國安八郡。


鎌倉の阿佛尼（川船水棹筆）

ひま多き不破の關屋は
　このほどの時雨も月も
　　いかにもるらん

關よりかき暮しつる雨、時雨に過ぎてふり暮せば、道もいとあしくて、心より外に(一)笠縫のうまやといふ所に、暮れはてねどとゞまる。

旅人はみのうち拂ふ
　夕暮のあめに宿かる
　　笠ぬひの里

二十一日、八橋を出でて行くに、いとよく晴れたり。山遠きはら野を分けゆく。晝つ方になりて、紅葉いとおほき山

(一)三河國寶飯郡。
もののあやめ
(二)寶飯郡。度津とも渡津とも書く。

に向かひて行く。風につれなきところどころ、朽葉に染めかへてけり。常磐木どもも立ちまじりて、あをぢの錦を見る心地す。人に問へば(一)宮路山といふ。

しぐれけり染むるちしほのはてはまた
　もみぢの錦いろかはるまで

この山まではむかし見し心地するに、頃さへ變らねば、

待ちけりな昔も越えし宮路山
　おなじ時雨のめぐりあふ世を

山の裾野の竹のある所に、茅屋のひとつ見ゆる、いかにして、何のたよりにかくて住むらんと見ゆ。

ぬしやたれ山の裾野に宿しめて
　あたり寂しき竹のひとむら

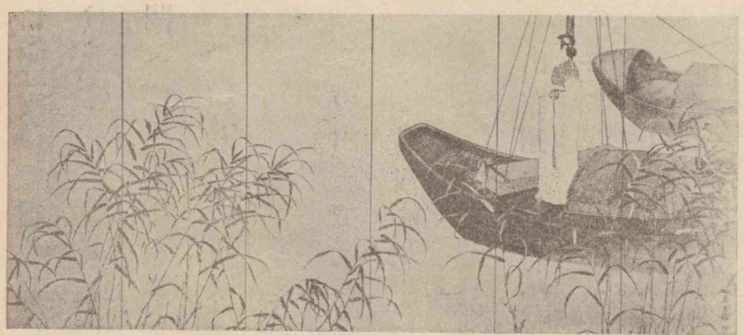
日は入りはてて、なほものゝあやめもわかぬほどに、(二)わたうど

とかやいふ所にとゞまりぬ。

――十六夜日記――

二〇 琵琶行

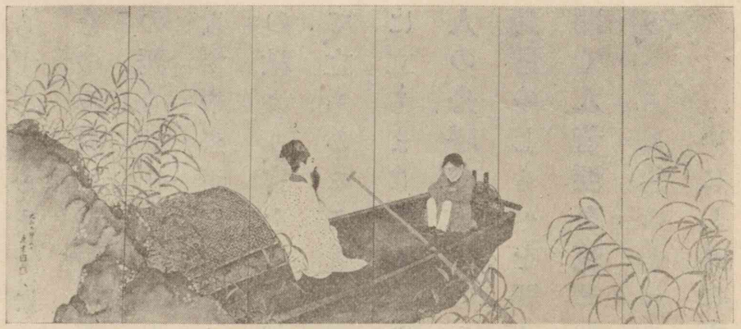
昔(一)元和十五年の秋、白樂天罪なくして、江州といふ所に流されぬ。その次の年の秋、入江の邊に夜友を送りけり。松風、波の音を聞くに、愁の涙いと抑へ難し。かくて小夜更行くほどに空澄みわたり、月影波に隨へるを見るにつけても、我が身一つは沈まざりけりと思ひ亂れつゝ、なほも渚を心細くて歩み行くに、浪の上遙かに琵琶の調さまざまに聞えて、かきあはせなどの有樣、世に類なきほどなり。これを



琵琶行（寺崎廣業筆）その一

(一)唐の憲宗帝の年號。(一四八〇年)

聞くに、怪しき心抑へ難し。あま人、もののふより外に、誰かはまた情あるべきと覺えければ、聲をしるべにて、「誰の人にか。」と尋ね問ふに、「我はこれ商人の妻なり。昔よはひ十三にて、琵琶を習ひ得たること世に勝れたりき。帝の御前にて一たび調べしに、百の御引出物を賜はりき。また眉目容貌ありがたく珍しきほどなりき。然れども春過ぎ秋暮れて、みめかたちありしにもあらず衰へにしかば、世に經る力失せはてて、せん方なくなりにしより、商人に契を結びて、この國の民となれりき。商人情なければ、別を惜しむこといと淺し。我を懇にせねば、出でて



琵琶行（寺崎廣業筆）その二

引出物
眉目容貌

いにし年
病の筵
袂朽つ

いぬる後、立歸るほど久し。歸るほど遲ければ自ら待たずしもあらず。かゝるまゝには、たゞ空しき船を守りつゝ、秋の月の凄じきをのみ見る。」といへり。白樂天「我琵琶の聲を聞きて愁深し。またこの語らひを聞くに、とり重ねたる心地す。我も君も愁の心同じからずや。必ずその愁の盡きせぬことを思ひ知るべし。我いにし年の秋より、官を遁れ都を離れてここに沈めり。また病の筵に臥して、立ちゐること容易からず。いともの心細きをりに、浪風より外に立ちまじる人もなき住所には、蘆の上葉をわたる嵐、をちこち人の舟呼ばふ音のみ聞えて、いまだ樂の聲を聞かず。今宵の君が琵琶のしらべを聞くに、ほとほと天の樂を聞かんが如し。」これを聽く人皆涙を流せり。その中にも白樂天一人袂朽ちぬと見えけり。

　いにしへにありへしことを盡さずば
　　袖に涙のかゝらましやは。

この人は、世の中の人の心の皆濁れるを憂しとや思ひけん、一人すまして、常は都に跡をなん留めざりける。

——唐物語——

二一　妻の眞心

佐々木信綱(一)

つぎねふ山背路を、
　人づまの馬より行くに、
　おの夫の徒歩より行けば、
　　見るごとに音のみし泣かゆ。
そこもふに、心しいたし。
たらちねの母が形見と
　わが持たるまそ鏡に、
　　あきつひれ負ひ並めもちて

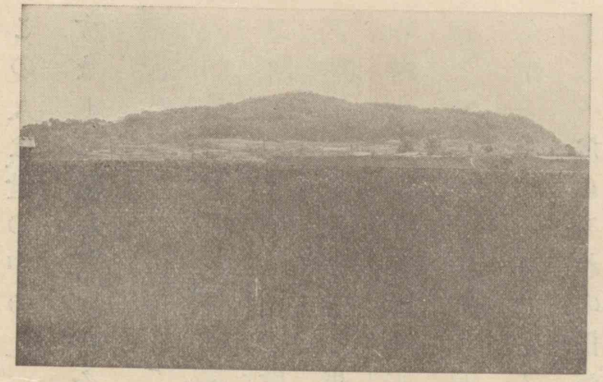
(一)歌人。文學博士。明治五年三重縣に生まれた。竹柏園主宰者。日本歌學史。和歌史の研究。校本萬葉集等の編著がある。

つぎねふ
馬より行く
音のみし泣かゆ
そこもふに
まそ鏡

(一)奈良縣高市郡。持統、文武兩天皇の宮居。

馬かへわが夫。

遠くには天の香具山が見え、藤原の宮(一)のいらかも霧に籠った



天の香具山を望む

秋の朝、籬の下には、萩、をみなへしなどが咲亂れてゐるわびしい田舍家の門を、貧しい旅商人は山城の方へ行くべく、今や立出でようとしてゐる。

送り出たのはうら若い妻で、その手には古い鏡と、蜻蛉羽のやうな薄い領巾とを捧げて、夫に渡さうとしてゐる。

妻は仲間の商人どもが、いづれも馬で行く遠い旅路に、わが夫が乗るべき馬もなくて、いつものやうに歩いて行かうとするのを悲しんで、世を去つた母の形見のこの二品を取

よしゑやし

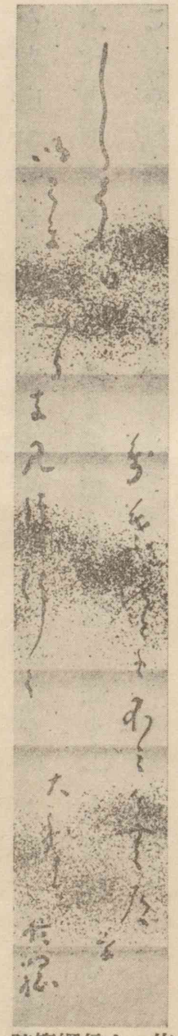
しくれ日のいこまかつらき見つゝ行く萬葉ひともふみけん道を

大和にて 信綱

出し、「これを金に換へてなりと馬を買はれよ。」と勸めてゐるのである。

夫は妻の心をうれしいとは思ひながら、

馬買へば妹かちならんよしゑやし
石はふむとも我は二人行かん



佐々木信綱筆蹟

と詠んで、「それには及ばぬ。馬一匹をよし買得ても、御身と倶に行く時には、御身は歩かねばならぬ。よしや石を踏んでも、二人で踏まう」と答へる。

これは萬葉集十三の卷に出てゐる歌である。かの山内一豐の妻が、鏡匣から黄金を取出して、夫の爲に馬を買はうといつた話

と、千餘年を隔てた好一對な物語である。夫妻の情はこのやうにあらねばならぬと思ふ。

二三　生活に伴ふ婦人の自覺

高島平三郎(一)

若い女性が現代思想の影響を受けて、物質に重きをおき生活を考慮するやうになつたのは、多くの餘弊を伴ふ點に於ては憂ふべきであるが、一面婦人の獨立、自覺を促す一大衝動となつたことを見逃してはならない。

婦人が、從來のやうに一に夫によつて生活し、所謂夫を天と仰いでこれに事へ、生活の安定を夫に保證してもらふといふ卑屈な考でなく、たとひ結婚後生活に困らないでも、何等かの職業的知識を得て、社會の爲國家の爲にこれを應用しようといふ高尚な考をもつやうになつて來たのも、生活といふことを眞面目に

(一)心理學者。東洋大學教授。廣島縣の人。心理學講話。逸話の泉等の著がある。

考へる自覺から起つたのである。

今日多くの職業婦人を生ずるやうになつたのは、所謂生活革命の結果、必要に迫られて起つた現象ではあるが、しかも、多くの婦人の中には、眞の自覺からして、萬一の場合の爲、或は純粹の興味の爲、或は社會に寄與する爲に、或職業に從事するものも少くない。現時我が國に職業婦人を輕蔑する風の漸次失はれつゝあるのは、誠に慶すべきことである。

時代錯誤

現代に於て、女性が孔雀のやうに着飾り、何事もなさず、夫の保護の下に生活してゐるのは實に時代錯誤である。現代人は須らく自己の力で自己の運命を開拓して、社會に寄與することを以て務とせねばならない。從來東洋に於ては一般に勞動を賤しむ習慣がある。曾て印度の或國王が、英本國の貴族に招かれた時、その國の貴族等が汗を流してテニスやクロッケをして遊んでゐる

時代思想

様を見て「あの人たちは貴族でありながら、何故にあのやうなことを自分でするのだらう。あゝした汗の出る仕事は家來にさせるがよい。」といつたさうである。運動は勿論勞動ではないが、要するに汗を出すやうなことは賤しい仕事で、貴族のすることでないといふ觀念が東洋人の頭には昔から深く浸潤してゐるのである。まして婦人は深窓の中で美しく着飾り、何事もなさず、じつと、おとなしくしてゐるのを上品と見られ、一般にさういふ境遇を望んでゐた。勿論今日でもかういふ境遇を最高の幸福のやうに喜んでゐる人もあらうが、自覺のある婦人は決してかやうなことを理想とせず、勞動を恥かしいと思はないやうになつた。實に喜ぶべき傾向である。我が國に於て、一部婦人の間に唱へられた生活改善の聲が、たとひ男子の協力があるにもせよ、漸次一般女性の間に強く廣く深く響かうとしてゐるのも、時代思想の生

寧馨兒

んだ寧馨兒の一つである。

消費生産

要するに、我が國の女性、特に若い女性に最も必要なことは、眞に自己の生活に目覺めて、一方に物質生活の眞價を認め、餘りに多くこれを評價しないと同時に、正當にこれを尊重し、奢侈贅澤を戒めて、その消費を有効にすることである。女性によつて生産される富も少くないが、女性によつて消費される富はそれよりも遙に多い。それ故、女性は生産と同時に、否、生産の前に、まづ富の節約について十分な科學的知識をもつことが必要である。たゞし、ここにいふ富とは、一切の物質を指し、我々の生活に必須なすべてのものを包含するので、單に賃錢、報酬だけに限るわけではないのである。

——女心と世の中——

(一)詩人。評論家。名は門太郎。神奈川縣の人。明治二十七年歿。年二十七。透谷全集二卷。十二文豪のエマアソン一卷は名著として廣くよまれてゐる。

二三　眠れる蝶

北村透谷(一)

けさ立ちそめし秋風に
「自然」のいろはかはりけり。
高梢に蟬の聲細く、
茂草に蟲の歌悲し。
林には、
鵯のこゑさへうらがれて
野面には、
千草の花もうれひけり。
あはれ、あはれ、蝶一羽、
破れし花に眠れるよ。

早やも來ぬ、早やも來ぬ秋。
物皆秋となりにけり。
蟻はおどろきて穴索め、
蛇はうなづきて洞に入る。
田つくりは、
あしたの星に稻を刈り、
山樵は、
月に嘯きて冬に備ふ。
蝶よ、いましのみ、蝶よ。
破れし花に眠るはいかに。
破れし花も宿借れば、
運命のそなへし床なるを。

春のはじめに迷ひ出で、
秋の今日まで醉ひ醉ひて、
あしたには、
千よろづの花の露に厭き、
ゆふべには、
夢なき夢の數を經ぬ。
たゞこのまゝに寂として、
花もろともに消えばやな。

二四　美しい心を保て

吉田絃二郎(一)

單純から複雜へ、無自覺から自覺へ、他力から自力へ。始めて世の中へ出る若い人々は、必ずこのやうな經驗を意識するに違ない。

(一)小說家。早稻田大學敎授。名は源次郎。明治十九年佐賀縣に生まれた。「磯ごよみ」「草光る」「運命の秋」「芭蕉」等の著がある。

學校生活は、社會に於けるよりは理想的である。

そこでは階級的差別や、貧富の觀念は餘り問題にされない。時としては、貧しいといふことが名譽とせられることもある。清貧だの、殉敎だの、節操だのといふやうな言葉に胸をとゞろかせるのも、この時代である。學園內に於ける若い人々の生活は、この地上に於ける最もユートピヤ(一)に近いものだと言ふことが出來よう。

一歩世の中に出ると、恐らく若い人々のユートピヤは、破壞せられるであらう。世の中には彼等が考へてゐるほど、清貧を樂しむ人は多くゐない。殉敎者も少い。隣から隣へ俗人が多い。我利的な人が多い。無節操な人が多い。不深切な人が多い。

學園の生活は詩である。世俗の生活は散文である。

しかし、學園の生活は、要するに人生の一準備的階段に過ぎな

殉敎

(一) utopia.

い。所詮、人は死ぬ日まで世俗の人間として生きなければならぬ。若い日の快い詩のみに醉つてはゐられぬ。苦澁な散文の中に生きてゆかなければならぬ。

人生とは寧ろ苦澁凝滯の散文の世を指していふのである。そこは覺めた人々の生活場である。一本だちの人々の眞劍な生活場である。苦しいことも、悲しいことも、自分一人で決めてかゝらなければならぬ生活場である。他人にたよつてはをられぬ世界である。眞實に人間といふもの、人生といふものがわかつてくるのは、その散文的世界に於てである。

或西洋の作家は、たとひ七つの星の世界の重さは計ることが出來ても、たゞ一つ永遠に測り知ることとの出來ないものがある。それは人間そのものであると言つてゐる。

誠に人間といふもの、人間といふものの心ほど、不可思議なも

のはないであらう。すべての藝術も、宗敎も、哲學も、人間の不可測な不可思議を巡つて作り出されてゐる。

世の中とは、畢竟、この不可測な不可思議をもつた人間の心と心の結合の上に、もつれの上に編上げられた現實でなければならぬ。その不可思議な網のもつれを解きほごすことの出來るのは、世の中の複雜性そのものの中へ飛びこんでからでなければならぬ。

近松の傑作が生まれるのも、この溷濁した複雜な俗世間の中に、作者の魂が浸されきつた後でなければならぬ。

世の中は複雜である。複雜であるが故に、その中には汚れたものもある。醜いものもある。のろはしいもの、あさましいものもある。同時に、世の中でなければ見出せない聖いもの、尊いもの、美しいものもある。

世の中へはいつてゆく時、人は始めて美の如何に美しく、人の心の如何に尊いものであるかを實感する。同時に、彼自身醜いもの、あさましいものにも馴親しみ易い機會に多く接しなければならぬ。

世の中へ飛びこむといふことは、大きな、しかし、愉快な冒險でなければならぬ。複雜極りなき世の中へ飛びこんで、清淨なもの、尊いものを體驗するか、或は醜いもの、あさましいものに馴れてしまふかといふことは、自身の心の置き方一つであり、そこから人生を善く生きるか、惡く生きるかの二つの道が岐れる。

いつまでも子供の心を失はないものは、天國に入るといふのは、世の中へ飛びこんで、醜いもの、あさましいもの、利己的なもの、虛榮的なもの、渦卷の中に置かれながら子供の心を失はないもののみが、善い生き方をすることが出來るといふことでなけれ

ばならぬ。

家屋敷をもつことや富をもつことが、決して善い生き方ではない。十臺二十臺の人々には、こんなことは問題にならないかも知れぬ。しかし、三十臺、四十臺の人々には、それが大事な問題になつてくる。彼等はすでに世の中の醜い影に襲はれつゝあるからである。

人を疑つてはならぬ。人を輕蔑してはならぬ。

若い人々にとつては、これは問題でないかも知れない。しかし、幾たびか僞られ、また裏切られた苦しい經驗をもつた世の中の人々は、人を疑ふやうになる。輕蔑するやうになる。氣の毒な墮落である。

子供は人を疑はない。人を輕蔑しない。子供の心を失つてはならぬ。

若い人々の眼はいつも美しい。その眼の美しさを失つてはならぬ。心が曇る時に眼も曇る。

二五 心の花

(一)色みえでうつろふものは世の中の
　ひとの心の花にぞありける
　　　　　　　　　　小野小町

小野の千古が陸奥の介にまかりける時
　　　　　　　　　　(二)小野千古母

(三)たらちねの親のまもりと相添ふる
　心ばかりはせきなとゞめそ

(五)勅なればいともかしこし鶯の
　　　　　　　　　　(四)紀貫之女

(一)古今和歌集に出てゐる。
(二)不詳。
(三)古今和歌集に出てゐる。
(四)紀内侍。
(五)大鏡に出てゐる。

　やどはと問はばいかがこたへん
　　　　　　　　　　赤染衛門

(一)ふめば惜しふまでは行かん方もなし
　こゝろづくしの山ざくらかな
　　　　　　　　　　紫式部

(二)わりなしや人こそ人といはずとも
　みづから身をや思ひすつべき

家を人にはなちて立つとて、柱に書きつけはべりける
　　　　　　　　　　(三)周防内侍

(四)住みわびて我さへのきのしのぶ草
　しのぶかたがたしげき宿かな

小式部内侍失せて後、上東門院より年頃賜はりけるきぬを、亡きあとにもつかはした

(一)千載和歌集に出てゐる。
(二)續古今和歌集に出てゐる。
(三)周防守平繼仲の女。
(四)金葉和歌集に出てゐる。

りけるに、小式部内侍とかきつけられたる
を見て詠める　　和泉式部

(一)もろともに苔の下にはくちずして
うづもれぬ名を見るぞ悲しき

病限りと見えたる時　　(二)小式部内侍

いかにせんゆくべき方もおもほえず
親にさきだつ道を知らねば

松風入夜琴　　(三)齋宮女御

(四)ことの音に峰の松風かよふらし
いづれのをより調べそめけん

(五)相模

(六)みわたせば波のしがらみかけてけり
卯の花咲ける玉川のさと

(一)金葉和歌集に出てゐる。
(二)和泉式部の女。
(三)名は徽子。重明親王の女。伊勢の齋宮になり、後に村上天皇の女御となつた。
(四)拾遺和歌集に出てゐる。
(五)源頼光の女。相模守大江公資の妻。
(六)後拾遺和歌集に出てゐる。

(一)鵜殿餘野子

末とほき息長(二)川を見わたせば
かすみをかづく春のにほどり

(三)土岐筑波子

わがせこがときあらひ衣ぬはなくに
をぎの葉そよぎ秋風ぞ吹く

(一)歌人。紀伊侯夫人に仕へて瀬川と稱した。賀茂眞淵の門人。
(二)滋賀縣坂田郡を流れる川。
(三)歌人。名は茂子。賀茂眞淵の門人。

改新女子國文卷七終

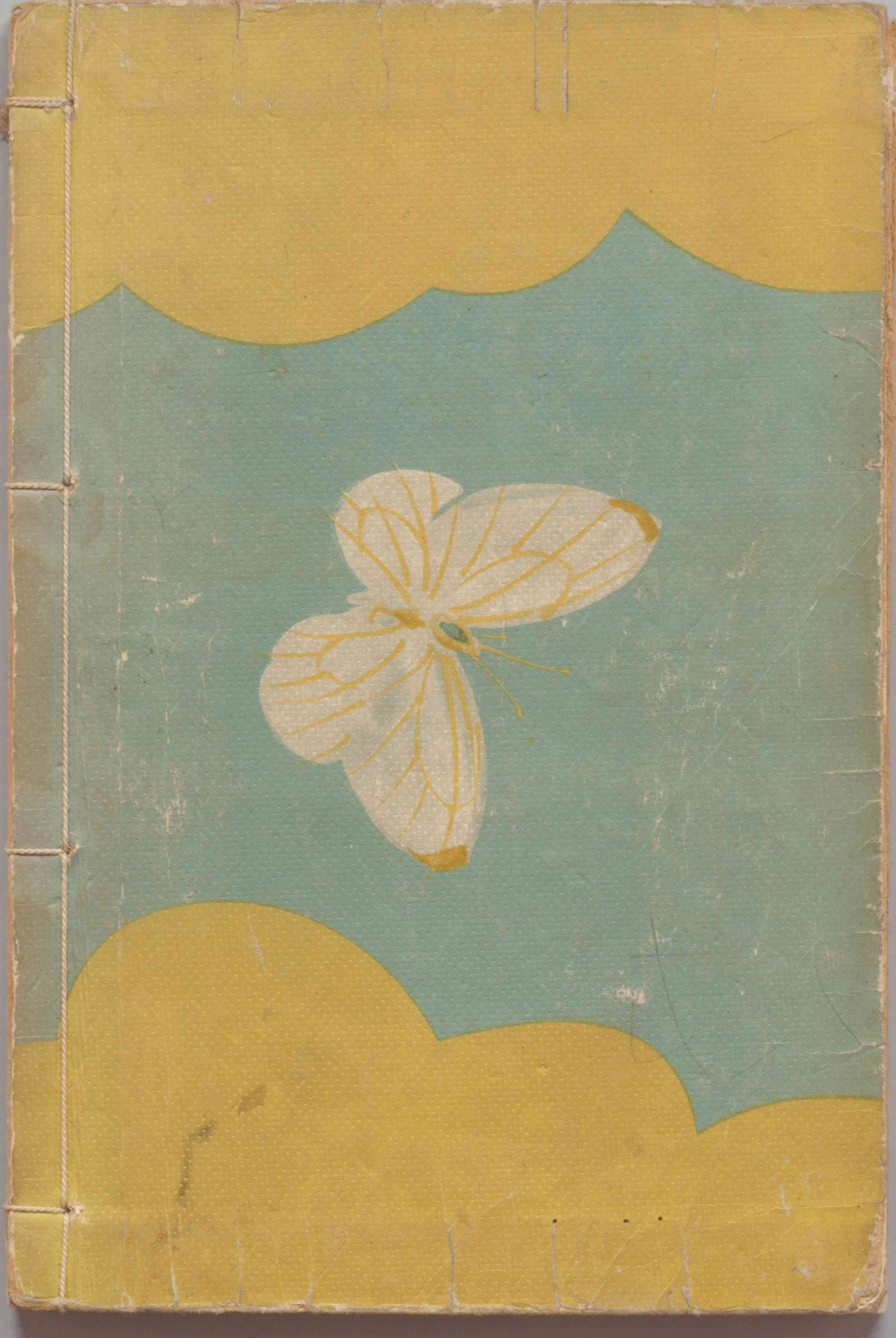
昭和四年九月二十五日印刷
昭和四年九月二十七日發行
昭和五年三月二十九日訂正再版印刷
昭和五年四月一日訂正再版發行

改新女子國文 奥附

定價	
自卷一至卷四	各金七拾錢
卷五、六	各金六拾參錢
卷七、八	各金六拾壹錢

編者　芳賀矢一
訂補者　橋本進吉
發行者　東京市神田區通神保町九番地　合資會社冨山房
代表者　坂本嘉治馬
印刷者　冨山房印刷部

發行所　東京市神田區通神保町九番地　合資會社冨山房
電話九段一九二三—一九二五番
振替口座東京五〇一番

浦野製

四A
粟屋孝子